
どこからか、羽音

にゃこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どこからか、羽音

【Nコード】

N8944R

【作者名】

にゃこ

【あらすじ】

ある日突然、恋人の死を告げる少年が現れた。
少年と私の、物語。

序章

「例えばさ、」

情事のあと、眠りの中に居た私は彼の声にうつすらと目を開いた。背中に感じる、彼の体温。暖かくて、心地よくて、とても優しい。カーテン越しに部屋を照らす白い光が眩しくて、私はわずかに目を細める。目覚まし時計で時間を確認すると、短針はまだ四を指していた。

こんなに早い時間から体を起こすつもりなどない。そう思って、私は無言のままもそもぞと体を動かした。外気に晒していた腕を布団の中に隠すと、彼はそれを横目で確認して微笑み、静かに目を閉じて続けた。

薄闇の中の、優しく囁くような声。頬を撫でるような穏やかな吐息。安心する。なんて、心地よい声なのだろう。私はわずかに目を細め、次の言葉を待った。

「例えば、俺が死んだらどうする？」

なんて質問をするのだろう、と私は寝返りを打って彼の方を向いた。そして彼の頬に、柔らかな髪にそっと触れ、どうするだろうね、と淡白に答える。

幼いころからの、少し低い抑揚のない声。

いつも可愛げがないと言われていた単調な私の口調を、彼だけは落ち着いた良い声だと言ってくれた。穏やかで聞いていて心地がいいと。

私は生まれて初めて、自分の声を、口調を褒められた。彼が初めて、私が愛しいと言ってくれた。

「……あなたが死んだら、か。そんなの考えたこともなかったわ。あなたが死んだら、私はどうなるのかしら」

少し考えて、あたしはまた口を開く。

「きつとね、多分どうもしいと思う。普通にお葬式に出て、涙も

見せないなんて随分と薄情な彼女だなんて誰かに陰口叩かれて、それから、いつも通りの生活に戻るんだと思う。……多分ね」

今までだって他人のお葬式で泣いたことなんて一度もないもの、と私は続けた。友人との別れも、大切にしていたものが壊れても、ごく身近な人が亡くなったときでさえ、私は決して涙を見せることはなかった。

幼いころから、あたしは本当に泣かない子だった。

怒られても叩かれても、何をされても泣かないものだから、瞳を潤ませることすらしないものだから、あんたの目には涙腺がないんじゃないの、などと言われたこともある。それも、嫌悪に満ちた口調で。けれど彼だけは、そんな私のことを気丈だねと言ってくれた。心が醜いからではなく、悲しみを感じないからでもない。それは心の強い証拠だと、そう言ってくれた。

私は生まれて初めて、この淡泊な性格を褒められた。

「……私が死んだら？」

ぽつりと、あたしは言った。

「もしも、私が死んだら。そしたら、あなたは どうする？」

彼は私と同じように、どうするだろうねと言って笑った。

いつもと同じ、気の弱い、困ったような笑み。私は彼の、この軟弱な表情が好きだった。どこまでも穏やかで、静かで、優しい人。程よく筋肉の付いた腕で私を抱きしめて、彼は答えた。

「そんなの、その時になってみないと分からないよ。」

…… だけど多分、ロミオのように自ら君の後を追うんだと思うよ。

まあ、ロミオのは勘違いだったわけだけど。ジュリエットも可哀そうだね、恋人の早とちりのせいで自ら死を選ぶことになってしまったんだから」

あの話はあんまり好きじゃないんだけどね、と一言続けて、口を閉じる。

私も、あの物語はあまり好きじゃない。あれは泣きたくなくなるくらい、救いようのない物語だから。ハッピーエンドでなければいけないと

は思わない。悲劇の中にしかない美しさと言うものもある。けれど、モンタギュー家もキャピュレット家も、ロミオもジュリエットも、好きになれない。あの二人は確かに愛し合っていたかもしれないけれど、酷く愚かだった。きっと、恋に落ちるにはあまりにも幼かったのだ。

……ああ、夜の空気が、まだかすかに残っているような気がする。なんだか、彼の甘い声に酔ってしまいそうだった。彼の香りに埋もれてしまいたくて、あたしは彼の胸にわずかにすり寄った。

とくん、とくん。

彼の規則的な心臓の音があたしの頬を撫でる。

あまりの心地良さに、うとうととまた目を閉じてしまいそうになる。規則的に奏でられる彼の心音は、どうやら、私の子守唄にもなるらしい。

「……私が、死に際に『生きていて欲しい』って言ったら？」

私の頭を撫で、彼は少し迷うように唸り、もう一度どうするだろうねと呟いた。

「それじゃあ、君の死体を冷蔵庫の中に入れて毎日話しかけることにするよ」

そうしたら生きていけるんじゃないかな、などと笑顔で囁く彼に、私は少し呆れの混じる笑みを向けた。

「まるで変質者だね。ねえ、知ってる？ 死体遺棄って犯罪なのよ」
「どうして人間の死体だと『保存』って言葉は使われないんだろうね」

直球で投げたボールを変化球で投げ返してくる彼に、私はふふつと笑った。そしてもう一つだけ、質問をした。

「それじゃあ、もしあたしがあなたに『死ね』って言ったら、どうする？」

彼は笑ったまま、躊躇いなく答える。

「死ぬよ。きつと、その言葉のままに死ぬんだと思う。最後に、君に深いキスをせがんで、熱い抱擁を求めて、犯して、殺して、君の

血をすべて飲みほして、そしてそれから、自殺する」

くすくすと笑って、彼は続けた。

「…それか、君の手で直接殺してもらうのも良いかもしれないね。俺は生も死も、すべてを君にゆだねるよ。君のためだったらきつと惜しむことなく命を落とせる」

答えて、なんて話をしているんだろうねとあたしを抱く腕にきゅつと力を入れた。これじゃあ本当にただの変質者だよね、などと言いながら。

直接に伝わってくる彼の体温。

なんて気だるい、情事の後。

「話を始めたのはあなたよ」

「そうだったね」

そうやって、かすかな狂気の中で共に笑い合ったのは二週間ほど前のこと。

彼は、死んだ。殺されたのだ。

深い深い闇の中に、彼は墮とされた。

愛しい人のいない世界は、時間は、まるで色彩を失ってしまったようで酷く空虚。音声のない、古くて退屈なモノクロの映画の中みたいだった。

彼と入れ替わりに現れたのは見知らぬ少年だった。

ファウンテン・ブルーの瞳が美しい、小柄な少年。

あたしと言葉を交わすよりも早く、彼は静かにこう言った。

『 君の恋人、亡くなったよ 』

愛しい愛しい彼の死を、伝えに来たのは青い瞳の饒舌な少年。

あたしは信じることを拒み続けた。

信じる必要性を、感じなかった。

だから拒んだ。

いつまでも、彼は死んだと続ける少年に苛立ちながら。

けれど少年の纏う香水の甘い香りに、あたしはいつもふわふわと、くらくらと揺らいでいた。

まるで、不安定な器に並々と入れられた液体のように。足元の覚えない、生まれたばかりの幼子のように。

甘い香りに酔いしれ、あたしは今にも零れ落ちてしまいそうだった。

それは、とても身近なものだったから。

『俺はホントのコトしか言わないよ』

そう言う彼の言葉は、酷く静かで穏やかだった。

出会い

0

どこからか、羽音がした。

1

彼の帰りを待っていた。

いつもと同じように、彼との家の、彼との部屋で。あたしの足元を、チャコールグレーの猫がうろつくと歩きまわっている。我が家の小さな飼い猫　リトル・レディは退屈そうにうにゃあと鳴いた。

ソファアに座ってテーブルの上のリモコンを手に取り、なんとなくテレビを付ける。面白い番組なんて何にもやってなくて、あたしは次々とボタンを押し、チャンネルを変えていく。そして最後に、ニュース番組にチャンネルを合わせてリモコンをテーブルに戻し、ソファアの背もたれにくたりともたれ掛かった。

明日の天気や、どこか遠く離れたところで起きた事件なんかを何度も繰り返し、怠惰に流し続けている退屈なニュースを見るともなしにぼんやりと眺めながら、あたしは二人掛けのソファアにだらしく座っていた。

「レディ、くすぐつたいわ」

長い尻尾であたしの足をふわふわと撫でながら歩き回るリトル・レディを抱き上げ、膝の上に乗せた。リトル・レディは嬉しそうにあたしの頬をひとつぺろりと舐めた。この子はもともと、捨て猫だった。彼と二人で出掛けた時になぜだか着いて来てしまい、そのまま家で飼うことになったのだ。

しばらくの間は彼から離れようとしなかったのだけど、最近ではあたしにも懐いてくれるようになってきた。この子の種類は分からない

いけど、毛足が長くて人懐っこいところかは、少しソマリに似ているかもしれない。

リトル・レディの背を二、三度撫でて、もう一度テレビに視線を向ける。見慣れたアナウンサーのお兄さんが、どこそこでこんな事件が起きましたと至極真面目な顔をして言う。ニュースというのは、何故こんなにも同じ内容ばかりを流すのだろうか。今朝にも見たはずのニュースを、どういう訳かあたしはまた眺めている。

「……？」

ふわりと、香る。……香水？

「君の恋人、亡くなったよ」

無防備だった。

柔らかなソファーに身を委ねていたせいで、その声に反応するのが少し遅れてしまった。だあれ？ とあたしはワンテンポ遅れた返事をして、振り返る。そこに居たのは青い瞳の少年だった。

……この香りは、オードランジュヴェルト？

シトラスやミントの甘さを秘めた、清涼感のある爽やかな香りがかすかに鼻腔をくすぐる。リトル・レディもその香りを感じ取ったのか、どこか楽しげにうにゃあと鳴いた。

「……誰なの？」

「誰でも良いじゃん。そんなことより、君、“エリカ”だよな？」

この少年はどうして、あたしの名前を知っているのだろうか。……

いや、そんなことよりもまず、この少年はどうやってこの家の中に入ってきたのだろうか。

あたしはソファーから立ち上がり、取り敢えず玄関と窓の鍵を確認した。ここは八階建てのマンションの五階だし、玄関の鍵も窓の鍵もきちんと閉めてある。物音だって何もしなかったはず。しかもオートロックだ。鍵も持たずに、ここに入れる訳がないのに。

あたしは一つの答えを導き出して、一か八かと穏やかな笑みを浮かべる少年に一つ問いかけてみた。

「……どうして、あたしの前に現われたの？」

こんな突拍子もない質問に、彼は何ということもなく口を開いた。
「『どこから入って来たの』じゃないんだ。面白いね」

あはは、と少年は楽しげに声を漏らす。

楽しげに笑うその反応に、ならばこの答えは正しかったのか、とあたしは少し嬉しくなつて少年を見た。子供らしい無邪気な笑顔に、あたしは少しだけ警戒を解いた。

少年の瞳は、まるで澄んだ湖の色を映したかのような綺麗な青。フアウンテン・ブルーの瞳は小波一つ立ちはしない。端正な顔立ちに映える淡い青が、酷く目を引く。少年がリトル・レディを馴れた手つきで抱き上げると、リトル・レディは一つ、少年に頼ずりをした。その様子に、人見知りをする子なのに、とあたしは少し驚いた。

「それじゃあエリカは、俺が何なのかもう分かつてるんだ？」

「何かは、だね。どこの誰なのかは知らないけど」

珍しいこともあるものねと言うと、少年はそうだねと頷いた。

少年の柔らかなテノールの声は聞いていても心地が良い。子供特有の甲高い声ではなく、落ち着いた男性の声と言ってもいいだろう。けれど、それは十歳にも満たないであろう少年の姿からは酷くかけ離れていて、不自然だった。

あたしはソファアーにゆっくりと腰を降ろし、少年に隣に座るよう勧めた。無言でばんぽんとあたしの隣の位置を叩くと、彼は素直に頷き、リトル・レディを抱いたままソファアーに座った。ふわふわと跳ねる茶色の猫っ毛。柔らかそうなそれに、あたしはそつと触れてみた。見た目通りの感触に、あたしは少しだけ目を細める。

「……エリカさあ、俺が最初に言ったことちゃんと聞いてた？ それが、俺がここに来た理由なんだけど」

「さあ。ガレットが死んだとか言っていたような気がするけど？」

「ああ。俺の話、ちゃんと聞いていたんだね。良かった。俺はね、エリカにそれを伝えに来たんだ」

ガレットというのは、あたしの恋人の名前。甘い甘いパイの名前を持つ彼は、本当に甘くて優しい人。その優しさはすべてのものに向

いているものだから、あたしは時々嫉妬してしまうのだった。

以前、彼と買い物に出掛けた時、彼は何かにつまづいて転んだ女の人を抱え上げ、擦り剥いた膝に絆創膏を貼ってやり、そしてさらにおまじないですと言ってその上にキスをしたのだ。それも、あたしの目の前で。問い詰めると、彼はきょとんとしてあれくらい普通でしょ、と笑った。

リトル・レディの時もそうだった。ガレットの後をふらふらと着いて来る痩せこけた子猫に気が付くと、彼はその小さな体を抱き上げて、誰もがクラリと眩暈を起こしてしまいそうなほど爽やかな笑顔を浮かべてこう言ったのだ。

『 帰るところがないのかい、小さな（リトル・）お嬢さん（レディ）？ 』

リトル・レディもきつと、その笑顔に眩暈を起こしたのだろう。ここに来てからしばらくの間は、追い出してやるうかと思うくらい彼にべったりだった。彼の横にちょこんと座ってごろごろと甘えるリトル・レディを捕まえ、そこはあたしの場所なのよと諭した回数は両手両足の指を足したって足りないくらいだ。

彼は本当に、甘い甘いパイのような人なのだ。ちっぽけな猫でさえ落としてしまう、無自覚な女だったらし。

「それで、愛しい人が亡くなったと聞いたご感想は？」

「別に。目を開けたまま寝言を言うことができる人もいるのねっていう新鮮な驚きを感じただけよ」

「あははっ。まあ、すぐには信じられないよね。だけど冗談でも寝言でもないよ。俺は、ホントのことしか言っていないからね」

「そう、不思議ね。君の存在は信じられるのに」
クッションを抱きしめ、目を閉じた。

「彼は死んでなんかいないわ」

「どうしてそう言い切れるの？ 人間なんて、すごく脆い生き物なんだよ。どんなに健康な人でもどんなに強い人でも、いつ死んだって可笑しくない。……俺も、君の恋人も、エリ力だってそうだよ。」

今ここで、いきなり死んでしまったとしても何ら不思議なことじゃないのに」

「……来週、あたしの誕生日なの。二十二歳になる。彼、言ったもの。『特別な日にしてあげるね』って」

「ふうん。それで、エリカは何を頼んだの？ ガラスの靴？ それとも、千匹皮の金の指輪かな？」

左右に揺れるリトル・レディの長い尻尾を目で追いながら退屈そうに言う少年に、なんだか少し苛ついた。

少年の人を小馬鹿にしたような口調や表情は、酷く癪に障る。あたしは思い切り少年を睨みつけた。少年はそれに気が付いていないように、リトル・レディの尻尾を掴んでは放しを繰り返しながら続けた。

「馬鹿だね。人の生死には約束なんてものは関係ないんだよ。そんなもの、バットエンドの童話くらい不自然だ。そもそも、未来を確定させようとするその行為自体が間違っているんだから。」

……人間ってさ、不安定なものとか不確定なものが近くにあると落ち着かなくなる生き物なんだよ。だから無意識のうちにそれをどうにかしようとするんだ。取り除くか、むりやり確定させるか、何らかの方法だね。そして、その確定させる方法のひとつが“約束”という行為。それ自体が酷く空虚で曖昧で不確かなものであるにも関わらず、それで未来が確定されたって錯覚して、安心するんだ。あははっ、愚かしいよね、人間ってさ！」

「何よ、それ……っ」

一度怒鳴りつけてやるうかと、少年の肩を掴んだ。けれど少年は今までと何も変わらない穏やかな表情であたしを見続けている。そして、饒舌に語る。

「……一つ、いいことを教えてあげるよ。」

『約束』って言うのはね、自分を安心させる為にするものなんだよ。自分の世界は今と過去だけで構成されている訳じゃない、自分たちにはこれからの人生が、未来があるんだ、……ってさ。言葉によって

未来を確定させることで、その自分の理想とする未来が確実にそこに存在するものなんだって思い込むために。

皆、自分の未来は誰かと共有できて、確実に楽しいものになるって思いたいし、信じたいんだ。たとえそれが、どんなに空虚で曖昧なものだったとしてもね。……だから人はいつも、誰かと『約束』をするんだ」

……なんて悲しいことを言うのだろう。

思っ、その静かに紡がれる言葉にあたしは動きを止めた。

彼は、正しいことしか言っていない。

ガレットの生死に関する事はともかく、彼の言っていることは正しい。『約束』は、あくまでも予定であって確実な未来ではない。百%のものなんて、存在しない。完璧ではないのだ。あたしは少年の華奢な肩からゆっくりと手を離れた。頭の奥の方が、すうっと冷めていくのを感じた。

『約束』の在り方は、よく考えると酷く不自然だ。

……本当に、どうしてこんな簡単なことに今まで気付くことが出来なかったのだろう。

未来なんて、確定出来るものではないのに。

「……君って、本当に嫌だ。憎たらしい」

「どうして？」

オードランジュヴェルトの香り。

……ああ。これは彼が、あたしに贈ってくれた香りだ。

感情に任せて怒鳴りつけてやりたいけれど、もうどこをどう攻めればいいのかも分からない。甘い香りが、少年の静かな目が、あたしにブレイキを掛ける。

「瞳の色がね、ガレットと同じなのよ。綺麗なファウンテン・ブルー。顔立ちも、少し似てるかな。……怒る気失せる」

はあと一つ溜め息を吐き、こちょこちょとリトル・レディの喉元を撫でている少年の頭にデコピンをした。パチンっと、小気味良い音がした。

「いつてエ！ 何だよ、何すんだよ！」

「八当たりのデコピンよ。……そんなことより、君の名前、教えてくれない？ 君が何者なのかとかそういうことには別に興味ないから、偽名でも何でもいいのだけど」

少年は何だよそれ、と不貞腐れたように言った。まだ痛そうに額を撫でている。

そういえば最近爪を切っていなかったな、とあたしは爪の伸びた指先を見た。確かに、この指でデコピンをされたら相当痛いだろう。後でちゃんと切っておかないと。

「一緒に居る時間が少しでもある以上、取り敢えず便宜上名前が必要になるじゃない。呼びたい時に名前も知らないんじゃない、とても不便だわ。いつまでも『君』って呼ぶ訳にもいかないし、変じゃないそれに『おい』とか『お前』なんて呼びたくないしね。そんな呼び方されるの、君だって嫌でしょう？」

少年はあたしの顔をちらと見て、つんと唇を尖らせた。年相応のその表情に、思いがけず笑いが込み上げてきて、あたしはクスリと声を漏らした。少年はなんだようと小さくぼやく。

「で、名前は？」

「……それじゃあ、 “ヘザー” って呼んでよ」

「変な名前」

「なら呼ばなくても良いよ」

不服そうに口を尖らせる様子はとても可愛らしい。冗談よ、とあたしは悪戯っぽく笑って見せた。

「ヘザー、ね。良い名前だわ。気に入った」

あたしはヘザーの頭から手を離し、立ち上がった。そしてくうつと一つ、伸びをした。

「お茶入れるけど、飲む？」

「……お茶よりココアが良い」

「了解」

言つと、すっごく甘いやつね、と付け足してあたしを見た。あた

しはもう一度了解、と笑んだ。

「お砂糖、いくつ入れる？」

「三つ」

「三つも？ まるでこども……」

子供みたいね。

言い掛けて、相手が本当に子供なのだと思います。

見たところ、十歳にも満たないように思う。……いや、実年齢までは知らないが、何故だか子供の相手をしている気にならないのだ。どこかが違う。これは、そう。“子供”ではなく“子供っぽい人”を相手にしているような感じなのだ。“子供っぽい”、大人の人。一歩引いて付き合うことのできる大人でありながら、子供のような無邪気な表情を見せる人。

まさかね。

ただきつと、この子が少し大人びているだけ。

雪平鍋で牛乳を温めながら、食器棚からガレットと一緒に使っているお揃いのマグカップを取り出し、ココアの粉末を入れた。ココアの粉つぼさが残らないよう、温めた牛乳を少しずつ入れ、掻き混ぜる。時間を掛けて作ったココアは、ふんわりと柔らかな香りを放ち、鼻腔をくすぐる。

「へザー、できたよ」

「ありがとう」

落ち着いたテノールの声は、やはりへザーの見た目には酷く不似合いだ。けれど、湯気の立つココアにふうふうと息を吹きかけている姿は年相応で、違和感がある。もしこれが可愛いボーイソプラノの声とかだったらここまで違和感は無かっただろうし、大人びているとも思わなかったのかもしれない。

そう思いながら、へザーを眺めて一口、ココアを飲んだ。

猫舌なのだろうか。へザーは少しだけマグカップに口を着けたが、すぐに口から離し、再び息を吹き掛け始めた。

「へザーって不思議ね」

「何が？」

「本当に死んでいるのはあたしの方だったりしない？　そして、貴方は死んだ事に気付いていない私を迎えにきた小さな死神」

ヘザーはくすりと笑ってあたしを見た。

「エリカは生きているよ」

「それも、“ホントのこと”しか言っていないのよね？」

「俺はウソなんか吐かないよ。口を閉ざすことはあってもね」

あたしはどうして、こんなにも穏やかなのだろう。子供は苦手だったはずなのに。どうしてヘザーが相手だとこんなにも穏やかな気持ちになれるのだろうか。分かるような気はするけれど、なんだかはつきりしなくて、曖昧な感じだ。

本当に、なんて不思議な人なのだろう。

あたしはもう一口ココアを飲んだ。

「……ガレット、帰ってこないね。遅くなるなら電話してくれればいいのに」

「彼は死んだんだよ。帰っては来ない」

「まだ、信じない」

気弱な笑みを浮かべることにない彼の姿を見るまでは、決して、信じない。

「まだ、信じたくないわ」

困ったような笑みを浮かべることにない彼の姿を見るまでは、幻想の中にいたい。まだ、幻想の中に居させて。

もう考えることを放棄したくて、あたしはヘザーの髪を撫でた。

なんだようとあたしの手を払い除けようとするその動きは、どこことなく小動物じみっていて可愛らしい。そういえばガレットは動物に好かれる人だったな、と何となく懐かしくなって、あたしはもう一度ヘザーの頭を撫で回した。

「エリカ」

「何？」

ヘザーは程よく冷めたココアを一気に飲み干すと、ずい、と空に

なつたマグカップをあたしの手に押し付けてきた。

「ココア、お代り」

「……はいはい」

空になつたマグカップを受け取り、あたしはまたキッチンへと向かった。リトル・レディはヘザーの膝の上から飛び降り、あたしの後を追つて来た。

「……どうして気付かないかなあ」

エリカの後ろ姿にヘザーはぽつりと呟いた。
自分だけに聞こえるように。

2

あたしとヘザーの、奇妙な共同生活が始まつた。

別段、何が変わつたというわけではない。ただガレットがヘザーになつたというだけ。それはとても大きな変化のようにも見えるけれど、実際、その生活に大した違いは出て来なかつた。

リトル・レディに尻尾で鼻先をくすぐられて体を起こすと、ヘザーは「お早う」と言つて目を細めて笑い、コーヒーを淹れてくれた。湯気の立つコーヒーの芳ばしい香りは、あたしの頭と視界をすつきりと覚醒させてくれる。香り高いこのコーヒーはとっても美味しいのに、ヘザーはあんな苦いものなんか飲めないと言つてココアを飲んでた。

「……いや、飲もうとしていた、という方が正確だろうか。ヘザーはまだ、ココアにふうふうと息を吹きかけている。そして時折口を付け、すぐにカップを離してまた息を吹きかける。そう言えば、あたしもこのくらいの歳のときはまだコーヒーが飲めなかつた。こういうところは子供らしくて可愛いのに、とあたしは思う。」

あたしは二人分の朝食を作り、ヘザーの向かいに座つて頂きますと

手を合わせた。ヘザーは身長が足りないらしく、椅子にクッションを置き、その上にちょこんと正座をしている。メニユーはベーコンエッグとトースト、昨日の夜の残りのスープにサラダ。リトル・レディにはキャット・フードと水をあげた。

朝食を終えてシャワーを浴び、キャミソールとボクサーパンツだけというだらしない恰好で室内をうろつくあたしに、ヘザーはなんて恰好してんだ、と少し顔を赤らめてタオルを投げつけてきた。どうやら早く服を着るということらしい。

そういえば、こういうことをすると、ガレットも早く服を着ると顔を真っ赤にしながら喚いていたっけ。あたしの裸くらい見慣れているだろうに、彼はそう言うところだけは妙に初々しい反応をするのだ。なんだか懐かしいな。

あたしはいはい、とヘザーに適当な返事をし、柔らかな猫っ毛を撫で回してからジーンズとＴシャツを身に着けた。肩に掛かる髪をドライヤーで乾かして、梳かしながら手早く首の後ろで一つにまとめる。いつも通りの薄い化粧をし、以前ガレットに買ってもらったビーズ飾りのついたピンで前髪を止めた。このピンはあたしのお気に入りだ。

そして、オードランジュヴェルトをハンカチに振りかけた。肌が弱くて、直接は付けられないから。

何一つ、変わらない。

ただ、ガレットがヘザーになっただけ。それだけのこと。

「じゃあ、学校行ってくるね。あ、後、今日はバイトだから帰るのが少し遅くなるから」

「ああ、行つてらっしゃい。気を付けてな」

優しい笑みを浮かべ、ヘザーはひらひらと手を振った。

あたしはちよつとだけ笑って手を振り返し、スニーカーの靴ひもをきゅつと結び直して外へ出た。空はすっきりと澄んでいて、気持ちがいい。一本の飛行機雲が、すーっと空を分断している。真っ白な線は長く、どこまでも続いていく。

「……あ」

玄関の扉を閉めて鍵を掛けてから、初めて一つの大きな変化に気がついた。

「働き手……」

家賃を折半してくれる人がいなくなった。

ガレットはもう働いていて、食費などはすべてガレットが出してきていた。あたしが自分で払っているのは学費と、家賃の三分の一だけ。残ったバイト代は自由に使っていていいよとガレットは言ってくれていた。それだけでもかなりの額にはなるが、バイトを二つ掛け持ちしているあたしにとっては、あまり大きな出費にはならなかった。

だけど、今の状況はちよつと、……いや、かなり苦しい。

食費は少し少なくなるだろうけど、食事をする人数は変わらないのだから大した違いではない。今は一家の大黒柱が働きに行けなくなったのと同じような状態だ。困ったな、とあたしは頭を掻く。少し、バイトを増やしたりした方がいいだろうか。何にせよ、今まで通りとはいかないだろう。

あたしはバスで行くのを止め、自転車に跨った。

「……この変化は、ちよつと痛いな」

呟いて、勢いよく自転車のペダルを踏み込んだ。

『たとえば』の話

0

強きを挫き弱きを助ける？ 馬鹿馬鹿しい。強い者が『悪』で弱い者が『善』だなんて、一体どこの誰が決めたんだ？

1

例えば、満員電車の中の耐え難い香水の臭い。

そんな感じの世界で、俺は生きている。自分でも変な例えだとは思いう。だけどきつと、俺にはこれ以上にしつくりとくる表現は見つけれないだろう。一つひとつは良い香りであっても、匂いは強すぎると臭いに変わる。それに四方を囲まれたらと考えて欲しい。移動の為の手段であるそれが、苦痛の小箱となる。

そこは耐え難いけれどあからさまに嫌な顔をすることもできず、面と向かって文句を言うこともできず、ただじっと耐えるしかないという苦行さながらの狭い空間。

ここは、そんな世界だ。

「おはよ、ガル。なあ、お前、もうすぐ任務だよな？」

「お早う」

軽い調子で聞いてきた同僚、アスカ・バルザックは俺の顔を覗き込み、わずかに口角を上げた。一言だけそっけなく返し、俺は書類の整理を続ける。

「その任務なんだけど、僕も行くことになったから。お知らせ」

「……了解」

アスカは整った顔立ちの、女顔の男だ。

もうすぐ三十路だというのに女装をして街に行き、声を掛けてきた男をからかって遊ぶのが楽しいのだという、性格と根性と趣味の悪

い奴である。どうでも良いから早く落ち着けと説教したくなる。この男は浮足立つどころかふわふわと浮きっぱなしで、苛々するくらい落ち着きがない。

『このつぶらな瞳にたくさんの男が騙されるんだ。むさ苦しい男たちの落胆した顔を見るのはとても快感だよ』などと嘯いていたこともあったか。

一七〇センチに満たない彼は細身で、まるで東洋人のように童顔だ。その所為か、まだ二十歳くらいにも見える。下手をしたら、まだ十代と間違われることすらあるかもしれない。

彼から時折聞かされる、『化粧をしてにつこり微笑んでみたりとかしたら、その辺の女の子なんか目じゃないよ』という言葉も、きつと嘘ではないのだろう。幸いなことに、俺はまだその女装姿を見たことはない。不可思議な思考の持ち主ばかりが集まるこの職場に居るアス力が、仕事場に女装で来ないだけの分別を持っていることに俺はひそかに感謝する。男にしてはかなり長い、セミロングの髪を二つに結んでいたり編んでいたりすることも稀まれにあるが、それはまあ、許容範囲内だろう。

しかし、何にせよこれが先輩なのだと思うと若干不愉快になる。敬語を使おうとかそういう思考は、出会って一週間でなくなった。ああ、こいつとの任務か。なんだか、厄介者を押し付けられた気分だ。書類の整理を黙々と続ける俺に、アス力は不思議そうに首を傾げた。「そんな雑用なんか自分でやることないじゃん。下っ端にやらせようよ」。使える奴くらいいくらでもいるでしょー？

「俺はこういう事務仕事の方が性に合っているんだ。任務とか、正直行きたくない」

「あははっ、何それ。我らの『アテナ』様がよく言うよ」
ギリシャ神話か。

最高神ゼウスの頭から生まれたという、知恵と戦の女神アテナ。そんな勇ましい神に例えられるほど、俺は大層な人間じゃない。睨みつけると、アス力は何を思ったのかにこりと笑って俺の頭に顎を乗

せた。

「『アテナ』様が嫌なら『二ヶ』様でも良いよ？ アテナを勝利に導く有翼の女神様。……ああ、もしかしたらガルには二ヶの方が合っているかもしれないね。サポートとかの方が得意だもんね。でもさ、ガルだってある程度覚悟をしてこっちに移動してきたんでしょ？ そういう文句は胸の内に潜めておかなくっちゃ」

苛々する。この男は俺に何を求めている？ 訳が分からない。一体何を言いたいんだ。どうしてだろう、この男は浮ついている。へらへらと、にやにやと、何かを企んでいるような笑顔が酷く不快だ。……まだ何か用があるのか？ 書類の整理が終わったら明日の準備をしないといけないんだ。早めに終わらせてくれ。それから、喋るたびに顎が刺さる。そこに頭を乗せている間は口を開くな」

「つれないねえ。僕だってちょっとくらい浮いた話題が欲しいんだよ」

俺の頭の上から肩の上に顔を置く場所を変え、アス力はそう言った。

「そこらの女にでも声掛けてみるよ。お前くらい綺麗な顔だったら着いてくる女なんかいくらでもいるだろ」

そうだね、とアス力はまるで無垢な少女のように笑って俺に抱きついてきた。

まったく、これが本当に可愛い女性を抱擁ならばどれほどいいだろう。それなら頬にキスのひとつくらい返してやるのに。なのにどうしてこいつなんだ、と俺は少し眉を寄せる。

何が楽しくてやっているのかは分からないが、とにかく不快だ。不愉快だ。失せろ、と肩の上の端正な顔に裏拳を入れる。アス力はへびやあつと妙な声を出すと、顔を押えてうずくまった。

「生憎だが、俺に男色の気はない」

「知ってる。僕だって男なんか願い下げだよ、むさ苦しいし、汗臭いし。……ところで、もう話はしたの？」

「何の？」

アス力の鼻が少し赤くなっていた。若干、目が潤んでいる。この

男は自分も男だということに気付いているのだろうか。すべての男がむさ苦しくて汗臭いというのなら、当然その中に自分も含まれているはずなのだが。まあ、こいつの事だから自分は特別だと考えているのは聞くまでもないが。

「この仕事のコト。彼女さんには言ったの？」

まだ鼻の頭をさすりながらアス力は言った。俺はわずかに目を伏せ、自嘲するように口角を上げた。

「今のところ、俺は警察ってことになってるよ。……そうだな。死んだら、幽霊にでもなって自分で伝えに行くさ」

「その冗談、全然面白くないよ。でも、“警察”かあ。当たらずも遠からずってカンジだねえ。……でもまあ、警察機関の一つなのは確かだから一応、ウソではない、の、かな。それにしても、ホント律義だよねえ、ガルは。必ずしもウソとは言えないようなウソを吐くんだから。健気だね、彼女には心配かけたくないんだ」

「……だから？」

「ガルは優しいねえ。君の彼女は幸せもんだねえ、そんなに愛されて」

僕もそのくらい愛してくれる可愛い恋人が欲しーなー、とアス力は床にへたりと座り込み、ぱたぱたとまるで駄々っ子のように足をばたつかせる。そんな馬鹿なことをやっているうちは絶対に無理だろう、と俺は口には出さず心中で呟く。

「いつかは話してやりなよ。そういう態度は、場合によっては相手を余計に不安にさせるんだから」

「……守秘義務があるだろう？　まあ、死人には課されないだろうが」

「守秘義務？　そんなもの、愛の前には無意味だよ。僕だったら彼女にだけは伝えるよ。で、言いふらさないようにって言い含めるけど」

要はさ、バレなきゃいいんだ。

アス力はそう言って狡賢そうな目をそつと細めた。

正直にすべてを語るのもどうかと思うけれど。そんなにペラペラ喋っていたら、話さないでいるよりも更に心配させる結果になるんじゃないか？……そりゃあ、俺だっていつかは話してやらなければとは思っている。だけど、彼女を汚したくないんだ。彼女は俺の、博愛の花だから。

「彼女にはこんな世界があるなんてこと教えたくないんだ。こんな薄汚れた世界のことなんて、知らないでいて欲しいんだ。ここは、汚れ過ぎているから」

知らなくても良い。知らないでいる方が良いことだってあるんだ。何も知らないでいる方が、きつと、ずっと気楽に、幸せに生きられる。それだったら話さないでいる方が、偽りを語り続ける方がいいんじゃないか？

「何も語らずに死んじゃったりしたら、お前、絶対に後悔するよ？

……いや、違うな。お前はそれで良いかもしれない。だけど彼女さんの方はきつと、何も知らずにお前が死んだりしたら悔やんでも悔やみきれないだろうと思うよ」

「縁起でもないことを言うなよ。お前の軽口は何故か本当になるんだから、そういうことを口走るのは止めてくれ」

お前が言つと、本当になりそうで怖いんだ。

「そんなの、ここの職場じゃ別に珍しいことでもないでしょ？ 今月だって、もう二人殉職してるじゃん」

そういえば、その片方はアスカに『死にそうな顔してるね』などとからかわれていたつけ。ああ全く、本当に縁起でもない。この仕事は生と死の狭間にあるのだ。いつでも、真っ黒な死神がうろついている。

「いい加減、彼女さんの事信じてあげなよ。こういうことは、大切な人にこそ話してあげるべきだよ」

信じているさ。彼女がどんな人より気丈なことも知ってる。だけど、怖いんだ。

「それに、嘘っていうのはいつかはバレるもんだよ。絶対にね」

正直に言って失望されたらどうする。

あいつの幻想を壊してしまっただろうする。

あいつが滅多なことじゃ泣かないということくらい俺だって知っているさ。だけど、もし泣かれたら？ 真実を語って、もし泣かれてしまったら。そしたら、俺は一体どうしたら良いんだ？

俺はあいつの泣き顔なんか見たくない。俺は常に、“正義の味方”でいなければいけないんだ。例えば彼女が、俺の過去を知っていたとしても。彼女はいつも、過去ではなく今を見ている。だから俺は、彼女を心配させちゃいけないんだ。

「じゃあね、お説教はこのくらいにしておく。後でコーヒー奢ってやるよ」

俺の思考を読み取ったみたいに、ぼんぼんと俺の肩を叩き、慰めるような声でアスカはそう言った。俺がコーヒーを飲めないことを知っているクセに。

「おい」

「ん？ なぁに？」

細身の背に投げた言葉に、アスカはにっと笑って振り返った。

「コーヒーなんてあんな苦いもん飲めるか。奢ってもらっならココアだ」

「いーよ。甘いココアにお砂糖とクリームもたーっぷり追加してやるよ。ちゃんと全部飲めよー？」

きつと飽和状態を通り過ぎたじやりじやりしたココアを飲まされるんだろっな。

吹き出してしまいそうなほど甘い、まるで罰ゲームのようなココア。あの人はそういう訳の分らないところでよく分らない嫌がらせをしてくるから。

『ガレット・コルマン、ガレット・コルマン。至急、会議室まで来て下さい。繰り返します。ガレット・コルマン、ガレット……』

社内放送だ。

ああ、行かないと。

2

例えば、目覚めたとたんに薄れてゆく夢の記憶。

それは現実なのか、それとも夢なのか。本当なのか、それとも嘘なのか。

あたしは時折、『今』が本物なのか偽物なのか分からなくなる。フイクションの中に居るような気がしてくる。

毎日が酷く曖昧で、今にも目覚めてしまいそう。

よく、今あたしは眠りの中に居て、夢を見ているんじゃないかって思うことがある。夢と現実、本当と嘘との区別がつけられないなんて、あたしはきつと狂っているのに違いない。

「彼氏が欲しい」

学校の友人、サラは食堂のテーブルに突っ伏して、寂しいとこぼした。最近、彼氏と別れて、というか一方的に別れ話を持ち出されたとかで、辛いらしい。サラは外見と中身のギャップが激しすぎるのだ。だからいつも、着いて行けない、だとか、そんな子だとは思わなかった、などと言われて振られてしまうのだとか。

あたしはよしよしとサラの頭を撫で、チョコレートの一つ渡した。ゆるくウェーブを描く長い金髪が日に透けて、きらきらと光っている。綺麗な子だな、と毎日顔を合わせるたびに思う。初めて会ったときは本当に天使みたいな子だと思った。

いつもお菓子を入れているポーチを見るとミルクチョコレートがもうほとんどなくなっていた。買い足しておかないと。

「……チョコだあ」

「チョコだよ。幸せのもと」

サラは金色の包み紙を剥がし、ポンと口の中に放り込む。そして甘いなあ、と呟いた。甘い甘いチョコレート。あたしはそれを、幸せの味だと思う。チョコレートはまるで、依存性の強い麻薬のよう

だ。

「美味しい？」

「うん」

あたしも一つ、チョコレートを口に含んだ。深い甘さが口の中に広がる。チョコレートの甘さはやっぱり後を引く。

「彼氏欲しいの？」

「うん」

「ならいつそのこと女の子らしく化けていれば良いのに」

「それが出来れば苦労しない。だけど、残念なことに私はとっても不器用なの。そんな自分を偽るようなことなんか出来やしないものでも、エリイがなってくれるなら彼氏なんかいらないわ」

「あたし女だけど」

「残念。そこの男なんかよりずっと男前なのに」

サラは顔に流れてきた長い前髪を掻き上げると、あたしを見つめて左右に首を振った。そして、もったいない、と溜め息をついた。

「オリエントな長い黒髪は絹糸みたいにさらさらだし、黒目がちな大きな瞳も黒曜石みたいで綺麗だわ。すつと通った鼻筋も長い睫毛もすごく素敵。ハスキーな声はカッコいいし、それに頭も良い。運動神経も良いし。ほら、この間なんかフェンシングの大会で入賞してたじゃない。あんたが男だったら私、絶対に惚れていたわ。ああもう、なんでエリイは男に生まれなかったのかしら。女に生れて来てしまったのかしら。神様って残酷よね、もう残念でならないわ」

まるで決まった台詞をいうみたいにほとんど息継ぎなしで一氣に言い終えると、サラは一度深呼吸をしてまた机に突っ伏した。

「そういう台詞は本当に残念そうに言わないで欲しいわ」

サラはさばさばとした性格で社交辞令的なことは滅多に口にしないから、その言葉に偽りはないと分かる。それが凄く嬉しい。

幼いころ、自分では黒くて悪魔みたいだと思っていたこの外見を、サラは羨ましいという。ざっくりと紡がれるサラの言葉は、とってもストレート。嫌なことは嫌、良いことは良い。それが氣に入らな

いという人もいるけれど、その内容は理にかなった事ばかりだから、すんなりと受け入れられる。過剰な褒め言葉には、なんだか照れてしまっけれど。

「それにあたし、彼氏いるんだけど」

「知っているわ、ミス・カフラ。何度となく聞かされているもの。年上の、警察官のとってもかっこいい彼氏さんでしょう？」

唇を尖らせて、氣にくわないとでも言うように頬杖を突くと、サラはもう嫌ってほど聞かされたわ、と呟いた。『ミス・カフラ』だなんて、あたしがそう呼ばれるのを嫌っているって知っている癖に、だってそんな呼び方じゃ、まるで気難しい先生みたいじゃない。だったら『エリカ・カフラ』ってフルネームで呼ばれる方がまだマシだわ。

「瞳が綺麗で、格好良くて、優しくて、料理が壊滅的に下手で、だけど飲めないコーヒーを淹れるのだけはすごく上手で、とんでもないくらい甘党で、笑顔の素敵な彼氏さんでしょ？」

そんなにガレットの事ばかり話していたかしら、と首を傾げるとサラはわざとらしく、いかにも不機嫌そうに唇を尖らしてはあーと深く溜め息を吐いた。自分で気が付いていなかったの、とでも言うように眉を寄せる。

「こっちは毎日ノロケばかりでぐったりしてるっていうのに」

あんまり話しているとは思ってはいなかったのだけど、そんなに呆れられるほど話していたのか。無意識って怖いな。なんだか恥ずかしくなって、あたしはサラにもう一つチョコレートを渡した。何故か、あーと口を開いて待機するので包み紙を剥がしてサラの口に放り込むと、カカオ七十パーセントのそれにサラは苦あ、と呻いた。

「……エリイ」

「ごめんね。ミルクチョコレートは、さっきあたしが食べたやつで全部なくなっちゃったの」

あとは興味本位で買ったカカオ七十パーセントとカカオ九十パーセントのチョコレートしかない。あたしはどちらも一欠けだけ食べて、

そのチョコレートとは思えないほどの強烈な苦さに、それ以上食べることができなくなった。

「けど七十パーセントの方を渡したただけまだ良心的だと思ってほしい。そっちの方がまだ、ほんのりと甘さを保っているから。残りのチョコレート、どうやって消費しようかな。捨てるのはもったいないし、次は誰に食べさせよう。……サラにはもう渡せないなあ。ばれちゃったから。」

「ねえ、エリイ。そのガレットさんといつどこであつたの？」

「何？ 警察官の彼氏でもつくりたいの？」

「ま、あわよくばと思つてね」

綺麗に整った顔に悪戯っぽい表情を浮かべてサラは笑った。

こういうときのサラはすごく幼い表情をする。でも魅惑的で、子供っぽくにつと齒を見せるその笑顔はどこか官能的にすら見える。無意識に、無邪気に誘う。彼女はなんて無垢な悪魔なのだろう。

まるで真白な、桜の花のようだ。

「……サラは、まるで桜の花みたいね」

言つて、少しはぐらかす。あんな出会いは、きつとなかなかないだろうから。

「桜？ あんなに儚い花が、私？ これでも図太く生きているのよ。こんな見た目だから、か弱そうとはよく言われるけど」

金色の髪を一房摘まんで、サラは肩を竦めた。

「儚くなんてないわ」

食堂の一角。誰が話を聞いていてもおかしくない。みんな、きつと驚くだろう。サラをこんな風に評する人なんていないだろうから。「あれは散る姿ですら人を魅了する、魔性の花よ。その証拠に、桜の幹はとても力強く根付いているじゃない。儚さのかけらもない、力強い幹が。あの木は儚いふりをしているだけなのよ」

「そうかしら？ 私には、儚い雪のような花にしか見えないわ」

「そう？ それじゃあ、花に喻えるのは止めようかしら。……そうね。桜でないのならサラはシンデレラね。謀が大好きなお姫さま。」

悲劇のヒロインを演じながら、どこかにチャンスはないかって鷹みにたいに目を光らせているの。王子の気を引くのも、意地悪な継母やお姉さんたちに一泡吹かせるのも、すべて計画していたことなんじゃないかしら」

「魔法使いのおばあさんがいないとシンデレラはお城へは行けなかったのよ？」

釈然としない、と言うようにサラは上目使いにあたしをちらと見る。

「だけど、魔法使いなんかいなくても自力で何とかしていたと思うわ。魔法使いの出現は、計画を早めるきっかけになっただけ。継母たちが出掛けてしまえばその後で家を出ることくらい簡単だし、家にはお姉さんたちのドレスが山ほどあるのよ。しかも全部、シンデレラが管理してるんだもの、どうにでもなるわよ。」

……確かに、王子が自分に惚れるかどうかは賭けだったかもしれない。でも、少し気を引くことさえできれば、何とかしたと思うわ」「どうやって？」

「片足だけハイヒールを履いて走るなんて、普通は出来ないでしょ？　少なくともあたしには無理。きつとこれも計画の一つだったのよ。もう帰らないと、なんて焦らしながら、一つだけ手掛かりを用意しておくの。王子はまんまとそれに引っ掛かって、シンデレラに捕まったの。すべては、シンデレラによって謀られていたのよ」

言って、あたしは笑った。一見清らかに咲く花こそ官能的、清らかに語られる童話ほど謀られているものだわ、と。サラは綺麗な金髪を長くしなやかな指で掻き上げて、変なのと呟いた。

「あたし、そんなに変なこと言っただかしら？」

「少なくとも私の『普通』の基準からはずれているわ、ファニー。あなたは将来小説家になるべきね」

ちよん、とあたしの鼻をつついてくる細い指先を払い除け、唇を尖らせてみせる。

「あたしは『ファニー』なんてふざけた名前じゃないわ」

「分かって使っているの」

意地悪そうに笑って、サラはそう言った。

「あたしは思ったことをそのまま言っただけなんだけど」

「知ってる。エリイは思ってもいないことを口にするような子じゃないわ。そんなに器用じゃないってことも私は知ってる。エリイは思ったことをそのまま言うか黙っているかのどっちかだもんね。」

それじゃあ、エリイは何の花なの？」

あたしはその問いに、わずかに笑んだ。

「あたしは、“博愛の花”なんだって」

君は、俺の博愛の花なんだ。

3

「エリカは、必要悪ってあると思う？」

最近、ガレットは仕事から帰るとそんな話ばかりする。

そのどこか哲学的な問いに、あたしはわずかに眉をひそめた。ガレットがこういう問いかけをしてくるとき、それは何かで悩んでいるときだ。いつも何の脈絡もなくいきなり話したすから、周りの人間にはその質問の意図が分からないことが多いけれど、それでもガレットの中では必ずどこかで関係性がある。

それにしても、こういう時の眠たげな、疲れたような瞳は心を病んだ子供のようで、見つめているとこっちまで不安になってくる。

必要悪？ と聞き返すあたしに、ガレットはそう、と頷いた。

……必要悪。

やむを得ず必要とされる悪、か。

うーん、とあたしは唸る。考えていることはその問いについてではなく、今の彼の精神状態について。

あたしはガレットを見つめた。

いつもと同じように静かで穏やかな表情だけど、なんだか憂えたよ

うな、悲しげな目をしているようにも見える。あたし達が出会ったときは明らかに違う。あの時の彼は本当に、自分を表へ出すことを拒否していたから。

悲しいのかそうでないのか分からないくらい、卑怯にも思えるくらい、彼はそのどちらでもないように振る舞うのがとても上手だった。彼がここまで気持ち素直に見せてくれるようになったことに、あたしは少し感謝する。

ガレットはいつも悲しいとか辛いとか、マイナスの感情を人に見せないように、表に出さないように生きているから。

知り合って間もない人だったら、この違いには絶対に気付かないだろう。いや、比較的親しい人だとしてもこの変化はなかなか分からないかもしれない。普段と今の違いも、ほんのわずかな物でしかないのだから。あたしも、最近になってようやく分かるようになってきたところだ。いつも同じように笑っているから、人には感情が読めないとか掴みどころがないとか言われているみたい。あたしは少し悩み、ガレットの問いに答える。

……必要悪の、有無。

「……あるんじゃないかな。例えばそうね、死刑執行人、とか」

正義の為に、人を殺める。

これは多分、必要悪だ。あたしの出した答えに、ガレットは力なく微笑み、左右に首を振った。

「その『悪』は、本当に必要なものなのかな」

ガレットはあたしの髪を撫で、ぽつりと言った。

殺人はどんな者がどんな理由で行おうと犯罪だ、と。それはいつの時代にも変わらずにある、不変の決まり事だ、と。

「これは飽くまでも俺の持論なのだけど……」。

死刑執行人は法的に殺人を許されてはいるけれど、それでも、俺は何よりも重い犯罪だと思うんだ。犯罪を合法化するために“正義の為”っていう仮面をつけているだけ。人間が、自分の中にあるルールを世界に適用させてしまっただけ。こうした場合くらい許され

ても良いよね、このくらいの妥協なら許されるよね、ってさ。……
法的に殺人が許容されているんだ。恐ろしい世の中だよね」
悲しげにつぶやく姿。

「人を殺すことに必要性なんかこれっぽっちもないんだ。……ただ、
自分が安心したいだけなんだから。死ぬことで償えるものなんか何
一つ有りはしない」

「……必要悪は、本当は必要のないものだということ？」

「命のやり取りをする物に関しては、そう思うよ」

ソファアの背もたれに倒れるように寄り掛かると、ガレットは静
かに息を漏らした。その疲れ切ったような深い溜息に、耳を塞ぎた
くなる。けれど何かあったの、なんて核心を突くようなことは絶対
に聞かない。聞いた途端に、ガレットは何もしゃべらなくなる。
心配かけてごめんね、なんて言っただけに黙り込んでしまう。

彼は悩みを、自分の中に押し込めてしまう。

それだけは、なんとしてでも止めさせないといけない。そうしな
いと、彼はきつと壊れてしまうから。

「ねえ、エリカ。ココアが飲みたいな。物凄く、甘い奴を」

ガレットは笑った。

今にも泣き出しそうな表情で、穏やかに、壊れてしまいそうな笑み
を浮かべた。

俺だってその法律に守られているのにね、と。

出会いの場所

0

彼女は言った。祈りの場に軍人の姿は不似合いだ、と。

1

俺達の出会い。

それは運命的なものでも感動的なものでも何でもなくて、けれどありきたりでも退屈でもないもので、どこか、刹那的なものだった。……きつともう訪れることのない、最初で最後の出会いになるのだろう、そういう刹那的なものなのだろうと、その時の俺はそう思っていた。

八月。

じめじめと、重たく湿った空気が不快指数を高めている。気温はこれでもかと三十五度を超え、湿度もそれに負けないくらいの高さを誇っている。こんな日に、俺は彼女と出会った。

「君、何をしているの」

町はずれの、ほとんど廃墟と化した教会。

まるで聖フランチェスコが立て直そうとした教会　たしか聖ダミアノ教会といったか　のような、外壁の崩れかけたとても古い建物。けれど、中だけはやけに綺麗に整っていて、日常的に誰かが掃除をしていることは明らかだった。どこかのもの好きか、はたまた神の声を聞いた預言者か。

その教会から少し離れたところで、彼女はひっそりと佇んでいた。

「……お祈りに来たのだけど、今日は入れなさそうね」

ノースリーブの丈の長い白いワンピースから、今まで日に当たったことなどないのではないかと思うほど、真っ白で細い腕が炎天の下

に惜しげもなく晒されていた。不思議なくらい汗一つかいていない涼しげな真っ白な肌に、真っすぐで艶やかな黒い髪。瑞々しいさくらんぼのように赤く色づいた唇。

……ああ、白雪姫とは彼女のことだったのか。

“凜とした美しさ”というものを、俺は初めて目にした。その気高さに、しばしの間見惚れてしまった。

「……ねえ？」

「……え？ ああ、そうだね。これからしばらくは中に入れなくなるね。君、ここにはよく来るの？」

「ええ、最近は毎日来ているわ。ここに来てお掃除をして、お祈りして帰るのが日課なの。今までは週末だけだったんだけど、今は夏休みだから」

預言者ではなく、モノ好きなお姫様。彼女はそう言いながら、チヨコレートをぽんと口に含んだ。甘い香りがふわと漂う。金色の包みのそれを俺に無言のまま一つ差し出すが、やんわりと首を振って断った。

「随分と信心深いんだね。……丁度良い。それじゃあ、昨日ここで不審な人物とかは見なかったかい？ ちょっと、厄介な事件が起きていてね。今、目撃者を捜しているところなんだ」

この教会の中で、殺人事件が起きた。捜査の結果、マフィア同士の抗争に一般人が巻き込まれたのだということが分かった。殺された男は、一体何を見たのだろうか。どうせろくでもないことなのだろうが、気になる。何の為にここに来たのか、何を見て殺されたのか。

黒で “KEEP OUT” と書かれた黄色のテープに手を掛けると、その女性はわずかに目を細めた。ふんわりと、長い黒髪が風に揺らぐ。

「教会で事件だなんて、背德的でなんだか素敵ね」

こんなことを言ったら不謹慎かしら。そう言ってくすりと笑ってから、彼女は俺の問いに答えた。

「怪しい人は見なかったわ。……良ければ、何の事件なのか知りた
いんだけど。もしかして殺人？　ここ、かすかに血の臭いがするわ」
抑揚のない平坦なしゃべり方。可愛げはないけれど、落ち着いた
静かな口調には好感が持てる。女性らしい見た目に反し、少し低め
のハスキーな声。彼女の声は、聞いていて心地良い。

「ごめんね、一般人に話す訳にはいかないんだ。今日明日中にニユ
ーになるはずだから、それを見てくれる？」

「分かった。それじゃあ、今日は帰るわ。血の臭いのする場所でお
祈りなんかしたくないもの」

「大通りに出て五分くらい歩いた所にも教会があつたはずだよ。最
近出来たばかりの、立派なやつが」

「そんなところに神様がいるとでも？」

そっけなく言つて、彼女は俺に背を向けた。

……ああ、なんて美しい。

まるで人に懐かない猫のようだと思った。

すべてを拒絶して歩く、勇猛で果敢で、弱さを見せまいとして虚勢
を張っている猫のようだ。とても綺麗な、真っ黒な猫。そう思いな
がら、俺は彼女の後姿を見つめていた。

きつともう、彼女に出会うことはないだろう、と。

予想に反し、次の日も、また次の日も、彼女は教会に來た。そして
彼女はまだ入れないのかと俺に問い、帰っていく。不思議な人だ。
何度も何度も捜査中の教会を訪れ、俺と一分二分ほどの会話をし、
帰っていく。名前も何も知らない、一人の女性。本当に、不思議な
人だ。

「今日も入れないの？」

「今日も、入れないよ」

相変わらず、“KEEP OUT”のテープが境界を作ってい
た。ここから先には入るなど、無言のまま周囲を威嚇している。警

戒色のそれを退屈そうに見やって、彼女はふうと息を吐く。

「ここは祈りの場なのに、まるで汚されたようだわ。こんなにも、警察だらけになっちゃうなんて。……ほんと、不似合い」

ピンと細い指先でテープを弾き、目を伏せて呟く彼女は気高く美しい。

「そう言えば君、前に言っていたよね。近くに立派な教会があるよって教えた時に、『そんなところに神様がいるとでも?』って。あれ、どういう意味なの?」

彼女は別に、と呟く。そしてかすかに笑った。自嘲したような、自分に呆れかえっているような笑い。

「……別に。ただ、新しい教会はあたしには、馴染みづらいってだけ。ああいう立派な所って警備の人がいっぱいいるでしょ? 祈りの為の場所なのに。」

もうすでに神様の庇護の中にいるというのに誰かに守ってもらわなと祈ることもできないなんて、そんなの可笑しいわ。馬鹿げてる。『ここには神様なんていませんよ』って公言しているようなものじゃない。それに、祈りの場に軍人の姿は似合わないもの」

そうでしょ? と唇を尖らせて彼女は俺に同意を求める。口角を上げてかすかに頷いて見せると、彼女は少し嬉しそうな表情をしてさらに言葉を紡いだ。

「それに妙にキラキラしていて、形だけって感じがするし、誰に祈りを捧げているのかが分からなくなるし。あの中に入ると、崇める対象がたくさんいるんだもの。」

あの教会がカトリックなのかプロテスタントなのかは知らないけど、尊い人が多すぎるわ。神に、キリストに、聖霊に天使に聖人たち。三位一体だか何だか知らないけど、ややこしくてわけが分からなくなる。その点、誰もいないこういう廃れたような教会だったら自分の信じるものに対して真っ直ぐに、素直に向き合えるわ」

「面白いね。そんな考え方、初めて聞いたよ」

あはは、と笑い声を洩らす俺に、彼女は何がおかしいの? と首

を傾げた。あたしは思ったことをそのまま言ったただけなのだけど、と。

「可笑しくなんかないよ。新しい考え方だな、とは思っけれど」
そう言った俺に、彼女はどこか楽しげに口を開いた。

「それに、こういう教会の方が何か居そうじゃない。神様が、妖精か、幽霊か、……もしくは、逃走中の指名手配犯か。まあ、それが何なのかは分からないけどね」

言って、彼女は踊るようにくると回って俺に背を向けた。

「もし本当に指名手配犯が潜んでいたらどうする？」

彼女の背中に、冗談半分の質問を投げかける。彼女は振り返り、一言、お友達になるわと答えた。指名手配犯とお友達になる、か。なんて愉快な発想だろう。俺には到底思いつかない答えた。

「じゃあね。明日、また来るわ。その時までには捜査が終わっていることを祈って」

彼女は、とても敬謙な信者だった。

“何か”を、心の底から深く信じていた。

彼女が何を信じていたのかは分からない。ただ、彼女は普通の人の思考から少しはみ出したところにあるような考えをする人だから、その“何か”を明らかにするのは酷く難しいことなのかもしれない。
「君、名前は？」

その“何か”が知りたくて、俺は再び背を向けた彼女に名前を聞いた。彼女は「エリカ」と一言だけ呟いて、振り返ることなく歩を進めた。

……エリカ。

ああ、孤独の花の名だ。

裏切りの花だ。

エリカ。

博愛の花。

宣言したとおり、エリカはまた次の日も教会に来た。その時にはもう捜査はすっかり終わっていて、事件を起こしたのはこのマフィアなのかも特定でき、そのうちの誰が男を殺したのかも分かっていた。

後は、その犯人からどうやってマフィア全体を終わらすのかが問題だ。芋づる式に全てを捕らえる事が出来れば良いのだが。ああ、またキツイ仕事が始まりそうだ。

「こんにちは」

「やあ、こんにちは」

右手を上げて、彼女に答える。本当は来なくても良い廃れた教会に、また俺は脚を運んでいた。推理小説の中の名探偵よろしく、何か新しい事実を見つけ出したわけではない。ただ、エリカに会うためだけにここに来た。“KEEP OUT”のテープは取り払われ、初めて区切りのない状態で言葉を交わした。

空には、見事な入道雲がぷかりと浮かんでいる。

「君は、学生？」

「大学一年。今は夏休み」

現役ならば十八歳か十九歳か。参ったな、五つも下だ。

「今日は中に入っても良いの？」

「良いよ。血の香りのする、人の死んだ場所で良ければね」

実際は、血の香りなんか疾の昔に消えてしまっているけれど。

「人が死んだのならなおさら、祈りを捧げなくっちゃいけないわ」

エリカはにつこりと華やかに笑って、俺の横を通って教会の中へと進んでいった。ピンヒールが石畳を叩くたびに、コツコツと乾いた音がした。もともと背の高い彼女は、そのピンヒールの所為でこれらの男よりもずっと身長が高くなっている。しかし、十センチ近いそのピンヒールを脱いだとしても、おそらく一七〇センチ以上あるだろう。長身で、すらりと綺麗に伸びた背筋に自然と目が行く。

その姿はとても清らかで、そのうち真っ白な羽根でも生えてくる

んじゃないかと思った。彼女は、本当は神の御使い……天使なのではないだろうか、と。

「……死んでから数日経つのに花を手向けに来る人もいない、祈りに来る人もいない。これじゃあ、どんな人でも浮かばれないわ」
寂れた教会に舞い降りた麗しき天使。

俺はエリカの後を追ひ、教会の中に入った。仕事抜きで見る教会は、輝いていた。外観からは想像もつかないほど中は綺麗に整い、塵ひとつない。磨かれたステンドグラスは、日の光を浴びて眩しいくらいにきらめいている。二列に並んだ長椅子の隅に、一人の老人が座っていた。

痩せこけた頬、中途半端に伸びた髭、小汚い服装、漂う悪臭。嫌悪を感じるほどのその身なりは、貧相な老人の姿を余計に卑しく見せていた。美しいこの教会とは酷く不似合いだ。エリカは迷うことなくその老人のもとへ行き、こんにちは、と微笑んだ。

そしてその隣に座り、久しぶりねと親しげに言葉を交わす。

「エリカ、彼は？」

老人は警戒心の強い目で俺を見ながらエリカに問うた。

「警察の人。そこで会ったのよ」

そうか、と老人は呟く。そして訝しそうに俺をちらと見た。疲れ切ったようなその表情は、どこか悲しげに歪んでいた。

「……この人はこの住人さん。長いこと、ここで暮らしているの。名前は知らないけれど、あたしのお友達よ」

手短にその老人を紹介し、エリカは俺に隣に座るよう促した。無言のまま、ぽんぽんと自分の隣の位置を軽く叩く。

「……エリカ、怪しい人はいなかったって言っていたよね？」

「顔見知りのおじさまが怪しい人の訳ないじゃない」

さらりと言つて、ねえ、と老人に同意を求めた。

「ただ住む場所がないというだけで『怪しい人物』扱いか……。そりゃあ、追いかけて回されもするわな。全く、それじゃあこの世界中、怪しい人物だらけだな」

「警察に追いかけて回されたの？ おじさま、大丈夫だったの？」

「ああ。『任意同行願います』だとさ。嫌だと言って逃げたら捕まってしまうたよ。任意だと言ったのは向こうなのに。そしてさんざ詰問されて、二日間は獄中で犯人扱いだ。本物の犯人が捕まったら『悪かったな』の一言で終わり。しかもあいつら、『もう怪しまれるようなことはするなよ』とまで言ってきた」

「ひどいわね。ねえ」

今度は俺に同意を求める。切れ長の黒い瞳が、非難がましく俺を見つめてくる。俺がしたわけではないし、そんなことはしたこともないのだが。

しかし、警察の実態など所詮そんなものだ。正義を盾に全ての事を疑ってかかる職業。その中では、調べつくしてから善と悪とが決まるのだ。調べてから、その人が白なのか黒なのかが決まる。調べる前にそこにあるのは、限りなく黒に近いグレーだけ。可能性のあるものは皆、犯人と同じように扱われる。

「……はははっ！」

「な、なんだお前！ なぜ笑う！」

老人は立ち上がり、俺を睨みつけてくる。今にも殴りかかってきそうなその勢いに、俺はまた笑いそうになった。涙を拭い、老人に向きなおる。

「あははっ、悪いな。つい。俺も元被害者なんだ、気持ちは分かるよ。昔は随分とやんちゃしたからさ。その所為で何もしてなくても犯人扱いだ。だから、俺は警察になった。もう疑われることのないようにね。警察なんて大体はそんなもんだよ。身内の事はすぐに信じる癖に他は全部疑ってかかる」

くすくすと笑いながら、話を続ける。

「ついこの間まで疑っていたガキでも、身内になったらもう疑ったりはしなくなるしね。ちよっと更正したふりをしたら、信頼関係くらいすぐに生まれる。とても一方的なものだけだね。紛い物の信頼なんて、簡単なもんだよ。」

それにね、『任意』なんて言ってもそこには任意性なんてまるでない。彼等は自分の一言に絶対的な力があると思ってる。来いと言えば、誰もが付いてくると思ってるんだ。白か黒かが決まるまで、警察が相手にするのは『犯人』だけだからね」

警察の実態を蔑む台詞。これはつまり、自分自身を蔑む台詞でもある。

その醜惡な言葉の羅列に老人はぽかんと口を開くと、はっと息を吐き出すようにかすかに笑った。警察を侮蔑しきったさっきまでの態度とは明らかに違う、穏やかな、けれどもどこか悪戯っぽい表情。

「最近のガキは心にもない謝罪の言葉を述べてねちねちと言いつく重ねるような奴等ばかりだと思っていたが、お前のような潔い男はなかなか好ましいな。そこまで言い切ってしまうといっそ清々しいぞ」

「良かったわね、おじさまに認めてもらえる人ってなかなかいないのよ」

「有難う」

にこりと笑って礼を返すと、エリカは唐突に俺の襟首を掴み、唇を重ねてきた。唐突に与えられた柔らかな感触に驚いて身を引くと、エリカはからかうように笑った。

「目、見開いている。そんなに驚いたの？」

「……何？」

「あなたの事、気に入ったわ」

「気に入ったって……」

俺の言葉など聞こえなかったようにエリカは続ける。

「そう言えば聞いてなかったわね、あなたの名前。なんていうの？」

「……ガレット。ガレット・コールマン」

「ガレット、ね」

そう言って浮かべた鮮やかな笑みは、俺の脳裏に深く焼きついた。ハマってしまったかな、と思う。

まさか五つも下の女の子にここまで主導権を握られるとは、思っ

もみなかった。慣れないけれど、嫌な感じはしない。このままずるずると彼女のペースに流され、引きずられてみるのも良いかもしれない。

自由奔放なエリカの流に身を任せて生きてみるのも、また一興。エリカとなら、きつと心地良く楽しめるだろう。

「今日はもう帰るわ」

「……エリカ？」

俺の頬に唇を寄せ、エリカは呟いた。また明日ね、と。

俺はその後ろ姿に見惚れていた。

すらりと真っ直ぐに伸びた後ろ姿は何よりも綺麗で清らかで、その背中に白い羽根がないことに違和感すら覚えてしまうほどで、やっぱり彼女は本物の天使だったのかもしれないと、俺はぼんやりと考えていた。

「　　美しいだろう？」

老人は穏やかに言った。

「彼女はね、天使なんだ」

現実と逃避

0

よく思う。現実を直視することほど怖いものはない、と。

1

バイトから帰り玄関を開けると、いつも通りリトル・レディがお出迎えをしてくれた。猫なのにまるで懐っこい犬みたい。早く構ってちょうだい、とでも言うように、あたしの足にすり寄ってくる。ちよつと待ってね、と軽く頭を撫でて部屋に入った。

「……？」

ダイニングテーブルの上に、ぽんと無造作に置かれた三冊の通帳と、四ケタの数字が書かれたメモ。

……この数字は、暗証番号だろうか。どれも覚えのないものなのに、その通帳の三冊ともがあたし名義になっている。開いてみて、愕然とした。

「これって……」

残高は、九桁。

合わせて、ではない。その三冊のどれにも、億単位の大金が入っている。

どうということなの、とあたしは頭を掻いた。ふと見ると、ヘザーは気持ち良さそうにソファアーの上で寝息を立てていた。二人掛け用の小振りなソファアーは小柄なヘザーには横になるのに丁度良いサイズらしく、ぴつたりと収まっている。呼吸の度、胸がわずかに上下する。

ああ、とにかく聞かなきゃ。

「ヘザー、ヘザー！」

「……なんだよ、うるさいなあっ」

被っていたタオルケットを剥がしてヘザーを叩き起して通帳を見せると、ヘザーはうー、と唸り声を出した。まだ眠たいのだろう、欠伸をして、薄く涙のにじむ目をこしこしと擦る。髪には寝癖がついて、ぴよこぴよこと無造作にはねている。

「これ、テーブルの上に置いてあったの。どういうことなの？ ガレットが帰って来たの？お願い、正直にこたえて。ねえ、これ、何なのよ」

寝起きで、まだ視界がぼやけているのだろう。ヘザーはわずかに目を細めて通帳に顔を近づける。そして寝ぼけ眼を擦りながらああ、と呟いた。

「遺産だよ」

「え？」

足もとをうろつろと歩き回るリトル・レディを抱き上げ、ヘザーは続ける。

「だから、遺産だってば。ガレットの。よかったじゃん、もともとエリカ名義だからなんの手続きもないね。相続税とかもかからないだろうし。ま、もともとガレットに家族はもういないんだし、どっちにしてもエリカの物になっていたんだらうけどさ。探したらそこら辺に遺書なんかもあるんじゃない？」

「それどういふことよ！」

ふああ、とヘザーはあたしの言葉を無視して大きな欠伸をし、涙を拭う。

「まだ眠いから、寝るよ。じゃーね、お休み」

そう言っただけで剥がされたタオルケットを被り直したヘザーに呆然として、あたしはあんぐりと口を開いた。その後すぐに穏やかな寝息が聞こえてきて、どうすればいいのよ、とあたしはヘザーの寝顔を眺めて言った。

「……遺書」

遺書なんか、ないわ。

あたしは三冊の通帳を閉じ、呟いた。

遺書なんかない。

遺書なんか……ある訳がないじゃないの。

だって彼は、死んでなどいないのだから。

・

取り敢えずは、金銭の問題は解決したと言っても良いだろう。一晩どうするか考えて、あたしはガレットの用意してくれていた通帳を机の引き出しにしまった。そして自分の通帳を出してその残高を見た。あまり購買欲がないから、それなりに貯まっではいる。だけど、これからはそうはいかない。生活をするにあたって、最低限必要なものがいくつもあるのだ。

家賃、学費、食費、ガス代、水道代。風邪を引けば薬を買うだろうし、酷くなれば病院にだって行く。季節が変われば少しは服も買うだろう。それに洗剤とかシャンプーとかの消耗品は必ず定期的に買わなくてはいけないものだ。

あたしは自分の通帳の残高を見て、溜め息をついた。いくら貯まっているとはいえ、学生の通帳の中身などたかが知れている。それなりに、以上の金額には到底ならない。出費を少し多目に見積もったら、精々三か月くらいしか持たないだろう。良くて、四力月くらいが限度。

出来るだけガレットの通帳には手を出したくないから、バイトは続ける。同時進行で、もう少し時給の高い所を探す。…それとも、どこか掛け持ちが出来るところを探した方がいいだろうか。あと、食費などは少し切り詰める。バスで学校に行くのはやめて、自転車で行く。

そうすればもう少し……半年くらいは持つだろうか。

「ふうん、引越しかは考えないんだ。ここより家賃の安い所なんて、いくらでもあると思うけど」

翌日、ヘザーに話をしたらそう返って来た。

ねこじやらしでリトル・レディと遊びながら言うヘザーの頬を、生意気、とむにむに突く。爪は昨日のうちにちゃんと切っておいたから、大して痛くはないはずだ。ヘザーは止めてくれとでも言いたそうにつんと唇を尖らせたが、抵抗することはなく、されるがままになっている。

確かに、ここは学生が暮らすには贅沢過ぎるマンションだ。

都心に程近い高層マンションの一室。オートロックで警備員も配置されていて、安全性は保障されている。3LDKで、部屋の一つ一つも広く作られているし、加えてペットも飼える。これだけ設備の整った、しかもまだ新しいマンションとなれば当然、家賃だって普通の学生が住むようなアパートなどと比べると随分と高いものになる。その額が二倍や三倍でないことは確かだ。

ただどこかはガレットが二人で暮らすのに、と選んでくれた場所だ。だから絶対に、手放したくはない。

ガレットがいない今、ここは唯一ガレットを感じていられる場所なのだ。なのに、どうしてこの場所を自分から手放すような真似が出来るだろう。

「引越しなんかするつもりはないわ。ガレットだって、そのうちひよっこり帰ってくるかもしれないじゃない。いつもみたいに、ただいまーって。その時ここに知らない人が住んでいたりしたら、ガレットがびっくりしちゃうでしょ？」

「あははっ、死んだ人を待つのか？ 来ないよ、彼は死んでるんだから。随分と入れ込んでいるんだね、ガレットに」

ヘザーは心底楽しげに笑って言う。

この手の発言はもう意見の相違だと思って全部聞き流すことにした。ガレットが死んでいるとか、確証もないのにそんな話はしないで欲しいし、聞いているとやっぱりかなり腹がたつ。けれどそれも仕方がないか、とあたしは一つ溜め息を吐いた。お互い、根本的に前提としている部分が違うのだから。

一方はガレットが死んでいることを前提に話し、もう一方はガレットが生きていることを前提として話しているのだから、話が噛み合わないのも当たり前のことだ。そういうふうに思っていれば、ヘザーの言葉もある程度までは割り切れる。

それとも、異世界の人間を相手にしているのだとも思えばもつと気にならなくなるだろうか。

「その言葉の使い方、間違ってるわよ、ヘザー」

ちよこんと鼻先を突いて続ける。

「こういうのはね、『入れ込んでいる』じゃなくて、『惚れ込んでいる』っていうの」

にやりと笑って、あたしはくうつと一つ伸びをした。

「あっそ」

呆れたように言って、ヘザーはわずかに口角を上げた。

仕方ないなあという感じの、年下にされると心底憎たらしい笑み。

好きにしなよとも言いたげな憎たらしい顔を一度むにと軽くつねって、あたしはソファアの上に放っていた鞆をつかんだ。

「バイト、行って来るね」

「日曜日はバイト休みなんじゃなかったっけ？」

「バイトの先輩に今日だけ代わって欲しいって言われたの。それじゃあヘザー、お留守番よろしくね。行ってきます」

ヘザーの傍にはいつも、オードランジュヴェルトの香りが漂っている。

…ああ、とろけてしまいそうだ。

2

「やあ、よく来たね」

奴は右手を上げ、親しげに微笑んでそう言った。紡がれるお気楽な口調に、ガレットは思わず目を見開く。

ああ、そうか。

俺は謀られたのか。

なんて間抜けな。

よく考えればすぐに気付けただろうに。

奴の後ろにずらりと控える厳つい男たち。こうなるように最初から仕向けられていたのかと、今更になってようやく気が付く。にっこりと、心底楽しそうに笑むその小柄な男。こんな奴に、俺は操られていたのか。ずっと奴の手のひらの上で、愚かにも無様な道化を演じていたのか。

この現状に、思わず嘲笑めいた笑いを漏らしてしまう。

ああ、これが夢ならどれ程いいだろう。

「とつても可愛い僕のマリオネット。君は僕と、遊んでくれるんだろう?」

そう言つて、俺を招き入れるかのように大きく両腕を広げた。

背景さえ違えば、もしかしたら感動の再開にも見えたかもしれない。若い恋人たちか、それとも十数年ぶりに出会った友人たちか。奴はまるで、感動的なドラマや映画のワンシーンを演じているかのようだ。ただ、その相手役を強引に割り当てられた俺だけは、酷く覚めきっているのだけれど。

本当に、これが夢なら、と思う。

こんなにも酷い夢ならいっそのこと覚めない方がいいのかもしれないな。

現実で起こりうる恐怖の中で怯えているよりも、夢の中でその恐怖を味わっていた方がきつと随分と楽だろう。…残念ながら、今自分が居るのは現実世界だと理解してしまっているのだけれど。

「……随分と、盛大なお持て成しだな」

「素敵なパーティーだろ? でもね、飾り付けがまだなんだ」

これから真つ赤な血の花を飾るんだよ、という奴の言葉に、俺はとにかく特攻していくことに決めた。

これから始まる戦いに、流れるであろう血液に、奴は今まで見たことがないくらい興奮している。まるでセックスをしている時のよう

なうつとりと陶醉しきった表情に、ぞくりと背が泡立つような恐怖を感じた。

そして自分に勝ち目がないということも、同時に悟った。ただ尻尾をまいて逃げだすような恰好の悪いことだけはしたくない。

どうしたって負けることくらい分かり切ってはいる。けれど、負け犬なりにプライドもあるし意地もあるのだ。だから、とにかく玉碎覚悟で正面から挑む。

精々頑張ってみよう。

死の宣告に來た小柄な死神に盾突いて、足掻いて、もがいて、生を勝ち取ってやる。この現状で、果たしてどれだけの時間生き延びることが出来るのかは分からない。分からないが、とにかく今の俺に出来ることはただ一つ。

「…精々、足掻いてやるよ」

今の俺に出来ることは、取り敢えず一人でも多く奴らを地獄に墮とすこと。

約束を貴方に（前書き）

この章には男性同士のキス、暴力的表現があります。恋愛等が絡んでいる訳ではありませんが、苦手な方はご注意ください。

約束を貴方に

0

ねえ、『エリカ』の花言葉って知っているかい？

1

「エリカ、これをあげるよ」

そろそろ寝ようかと二人でベッドに入ると、ガレットはダブルベツドの下から小さな紙袋を取り出して、あたしに手渡した。渡しながら、いつも寝る前に服用している白い錠剤をぽんと口に入れ、水で流しこむ。詳しくは知らないけれど、何かのアレルギーを抑えるための薬だと聞いた。

小さな袋の中には、可愛らしく包装された小さな箱。その箱の中には、緑色の小さな瓶。ちゃぽん、と中の液体が音を立てて揺らいた。『オードランジュヴェルト』

……香水？

「どうして？ 誕生日でもないのに」

言っと、ガレットは笑った。俺の一番好きな香りなんだ、と。そして少し貸してね、とあたしの手の中にある小瓶に手を伸ばす。

「だからいつも、身に付けていて。とても優しい香りだから」

言いながら小瓶のふたを開けると、あたしの髪をゆるくまとめているシュシュに爽やかな甘い香りを吹きかけた。少し前までは香水の香りは甘ったるくて嫌いだと思っていたのだけど、この香水の香りは清々しくて嫌じゃない。シトラス系の、綺麗な香り。優しく甘い笑顔を浮かべ、ガレットはそれに口付けをした。

「……肌、弱かったよね？」

「あ、うん」

髪を撫で、もう一度口付けをし、ガレットはあたしをきゅっと抱きしめた。

「……」

「何かあったの？」

ガレットは何でもないよ、と左右に首を振る。そしてあたしから一步離れた。いつも通りの、気の弱い笑み。あたしはこの軟弱な表情が大好きなのだ。彼の優しさを表す、控えめな笑み。ああ、なんて愛しい。

「肌が弱い人は直接肌にはつけないで、アクセサリーとかハンカチに振りかけて使うと良いんだって。あと、洋服の裾とか。そうしたら、肌も荒れないですむからって、店員さんが言ってた」

「ありがとう」

癖のある茶に近いブロンドの髪は柔らかく、ワックスを付けていないとふわふわと無造作に跳ねてしまう。あたしは寝ぐせみたいに跳ねるガレットの髪を手櫛で整えながら、お礼を言った。甘すぎないシトラスとウツドの香りが、ふわりと静かに漂う。

「……素敵な香りね。穏やかで、まるであなたみたいだわ」

「よかった、気に入ってもらえて」

いつもと変わらないその表情は、どこか憂いを帯びていて。

「……本当に何でもないの？」

「何でもないよ。ただ、明日から仕事で少し家を空けるだろ？ だから、その間寂しくないように、と思ってさ」

「今までだって何度かあったじゃない」

けれど、優しく微笑むその表情は、どこか悲しげに歪んでいた。

「…ガレット」

「ん？」

その胸に、今度はあたしから抱きついた。細身で、けれど良く鍛えられた身体。しっかりとしたその胸板に、あたしは顔を埋める。ねえガレット、あたしは何も言わないよ。どんな時でも、いつでもあたしはあなたを待っているよ。絶対に、あなたに背を向けたりな

んかしない。あなたの事なら全部、真正面から受け止めてあげる。
何があっても、どんなに酷いことが起きたとしても、あたしはあなたの味方だから。

……だから、お願い。何かあったときは、あたしを頼って。

「あたしは、ガレットの傍にいるよ」

「……うん」

「あたしは絶対に、貴方から逃げたりなんかしないから」

「うん」

「何も話さなくても良いよ」

「うん」

……だから、お願い。

「だから、」

お願いだから、あたしを頼って。ほんの少しで良い、あたしに、
寄り掛かって。

「……っ」

言葉が、出てこなかった。

言葉にしてみようと、何かが壊れてしまうような気がした。

「……大丈夫」

あたしの心を察したように、穏やかにガレットは呟いてあたしの
頭を撫でた。

「俺は今でも、エリカには十分助けられている。何があってもエリ
カだけは俺を裏切らないでいてくれることも、ちゃんと分かっている。
最後まで、俺を信じていてくれるってことも。俺がエリカを愛
しているのと同じくらい、エリカも俺のことを愛してくれているの
もちゃんと知っているよ」

だから
……

後に続いたその言葉に、あたしは無言で頷いた。

だから、いつまでも俺の『博愛の花』でいて……。

もう、口を開くことさえ苦痛だ。

体中に出来た痣は、じくじくと鈍い痛みを放つ。体中に刻まれた傷は、たらたらと鮮血を流す。

「どうしたの？ 嗚呼、傷が痛むのかい？ そうか、可哀そうにね」
酷く演技じみた台詞を吐きながら、俺の腹に蹴りを入れる。その周囲で、厳つい男たちは豪快に笑い声を上げた。こいつ等もさつきまでは奴と一緒に俺をいたぶっていたのだが、ここからは一人でやらせてよ、という奴の一声に壁際に寄った。予想が外れた。まさか、奴がこんなにも高い地位にいたなんて。こんなのは初めてだ。ここまで、見事に裏切られてしまうなんて思ってもみなかった。

鳩尾に鋭い衝撃が走ったとの同時に、ひゅつ、と喉が細く息を漏らした。咳込み、あまりの激痛に意識が飛びそうになる。苦しくて息が出来ない。どうやら肋骨が折れたようだ。…左腕、両足、それから肋骨が、多分四本か五本。他にも折れているところはあるだろうけど、ただ、それすらも分からないくらいに体中が痛い。体が動かない。くそつ、視界がかすんできた。

「ねえ、今どんな気持ち？ 悔しい？ 苦しい？ それとも、痛すぎてもう意識が飛びそうなのかな？ ねえ、教えてよ。今、どんな感じなの？」

黙れ。へらへらへらへら笑ってんじゃねえよ、気色悪い。人の血を見て喜んでるなんて、心底趣味の悪い奴だ。前から趣味も根性も悪い男だとは思っていたが、これほどまでとは思わなかった。全く、こんな体じゃ抵抗することすら出来やしない。いい加減にしろ、この野郎。

「すごく綺麗だよ、ガレット。ぞくぞくする。鮮やかに色付く赤。上質な赤ワインよりも輝くルビーよりも華やかに咲く赤。…ホント、

生きた人間から流れ出す血液ほど美しいものはないよねえ」

それが美しい人間のものであればなおさらね、と奴は長い指先で俺の頬に刻んだ傷をなぞりながら言った。

なんて、気持ち悪い。

…こいつは狂っているのか。

それにしても、こんなにやられればなしでは気に食わない。

…何か、反撃は出来ないだろうか。体中、傷だらけで上手く動かない。だけど、右手だけはまだ辛うじて動く。

どうにかして、奴に一矢報いてやることは出来ないだろうか。

「……ッ！」

髪を攫まれ、顔を上げられた。

「傷だらけだね。もったいない」

酒臭い息を吐きながら、奴は俺を見て笑った。せつかくキレイな顔をしているのに台無しだね、と。言いながら、ウィスキーの瓶を取り、ぐいつと煽る。

「…なあガル。ガレット。最期なんだからさあ、なんか言ってみるよ」

俺の頭を床に叩きつけ、手を離す。そして憎たらしく、忌々しく、奴は言った。

「人生最後のお願い事、内容によっては叶えてやっても良いよ？」

その言葉に、俺は顔を歪めた。この男に叶えられる願いなど何も…。

…ああ、そうだ。

胸元を抑え、苦痛に耐える。

「…じゃあ、…ひと、つ」

息も絶え絶えに口を開いた。

苦痛に耐えきれず　苦痛に耐えきれなかったように見せかけるため　咳き込み、荒い息を吐いて俺は体を丸めた。そして、気が付かないように胸ポケットから取り出した白い錠剤をいくつか口に含んだ。

「なあに？」

「…さい、ご…に、キス、して…く、れ…」

その言葉に、奴は驚いたように目をまん丸に見開いた。そして不器用な学生みたいに笑って、良いよ、と答えた。

「ガレットにそんな趣味があったとは知らなかったよ。でも、いいよ。そのくらいのお願い事なら僕でも叶えてあげられるよ。だけどさあ、僕の唇はすごく貴重なんだよ。だから、感謝してよね」
口に含んだそれを俺はガリと噛み砕いた。強烈な苦みが口内に広がる。奴は丸まっている俺を仰向けに寝かせると、恋人にでもするように俺の髪をふわりと撫でた。その不似合いな優しい手つきに、俺は一瞬眉をひそめる。

「それじゃあ、オヤスミ」

横になったままじゃやり難いから、と奴はぐったりとして力の入らなくなつた俺の体を抱え上げ、唇を重ねた。たつたそれだけのことなのに、体中に激痛が走る。

俺は舌を出し、奴の唇を割るようにして口内へと侵入させた。…一緒に、噛み砕いた錠剤も。味覚が麻痺するほど酒に酔っているのだろうか、強烈な薬の苦みにも奴は顔色ひとつ変わらない。それとも血の味と混ざっているせいでよく分からなくなっているのだろうか。とにかく、執拗に唇を重ねた。

ぴちゃぴちゃと、醜く濡れた音が耳を犯す。

「……んっ」

奴がかすかに声を漏らした。頭を離されないように、俺はどうにか動く右手で奴の頭を固定し、舌を絡め、キスを続けた。そして、奴が薬をたっぷりと含んだ唾液を呑み下したのを確認してから唇を離れた。奴の呼吸が荒く乱れている。俺を床に寝かせると、奴はにっくと笑って口元を拭った。

「随分と情熱的なキスをするんだね、驚いた」

「俺は……お前が、キス、に……慣れ、てないのに、驚い、たよ」
慣れていそうなのに、という言葉は奴の蹴りのせいで出てこなか

った。うるさいよ、と言って俺の腹をまた何度か蹴りつける。ぐい
っと酒を煽る姿を見て、俺はひとつ息を吐いた。酒のボトルは、も
うほぼ空になっている。

「……っ!？」

カクン、と奴は崩れた。まるで糸の切られたマリオネットのように。
飲ませたのは、いつも服用している催眠剤。

「…な、にを…したっ」

うずくまり、脂汗を流す。

催眠剤はアルコールと共に摂取すると、急激な中枢神経の抑制作用
が引き起こされて昏睡や死亡の危険性があるのだ。薬を処方された
ときに医者から言われた『絶対に酒は飲むな』という言葉を思い出
し、俺は腹の中で拳を握る。

奴は胸元を抑え、苦しげに不規則な息を吐く。

薬を噛み砕いておいたためか、利くのが早かったようだ。周囲の男
たちは奴に駆け寄ると、何をしたら俺に叫んだ。俺にはもう答え
る気力などなかった。呻くことすら出来やしない。

答えると、男たちは俺の胸倉をつかむ。ぎしと、骨が軋んだ。

「た、だの……催眠剤、だ」

答えながら、思う。

この中に、誰か医者を呼びに行くような賢明な奴はいないのだろう
か、と。上手く処置をすれば奴だってまだ助かる可能性があるとい
うのに。ああ、けれど莫迦の集まりと言うのは御しやすい。良い。
もう尽きた気力を無理やりに引っぱり出して侮蔑した笑みを向ける
と、激怒して揃いも揃って俺に攻撃を開始した。
やっぱりトップが居なくなると呆気なく崩れていくものなんだな、
と俺は愚かな男たちを見上げた。すぐ横で苦しんでいる奴の事など
すっかり忘れてしまったように、男たちは俺に攻撃を加える。

くたばれ。何を笑っている。気に食わない。死ね。

俺への一方的な暴言が飛ぶ酷い喧騒の中で、奴は崩れ落ち、瞼を閉
じた。まだ死んではいない。ただ昏睡状態にあるだけだ。しかし、

この状態では息を引き取るのも時間の問題だろう。

そうだ。早くに意識を失ってしまった方が良い。その方が苦しまずに済む。

ああ、俺ももうすぐだ。

せめてもの償いだ。目一杯苦しんでから逝ってやろう。裏切られたとはいえ、かつて仲間だった者を先に逝かせてしまったことへの償い。何よりも不自然に、童話のように朽ち果てよう。

一人が大きなナイフをとり出し、きらりと光らせた。ああ、あれで刺されて、俺は死ぬのか。

エリカはまだ、俺の帰りを待っているのかな。あの家で。今どうしているんだろう。この時間だったら、今はまだバイト中かな。それとももう、家に帰ってくつろいでいるころだろうか。

もうすぐ終焉を迎える俺の目には、ありきたりな小説やドラマみたいに人生の走馬灯なんか見えやしない。思い出すのは、想うのは、どれもこれもエリカの事ばかり。

あたしが、死に際に『生きていて欲しい』って言ったら？

しばらく前の、エリカとの会話。

あのとき、俺は何と答えたんだっけ。

…ああ、そうだ。どうするだろうねと呟いて、そして、こう言ったんだ。

それじゃあ、君の死体を冷蔵庫の中に入れて毎日話しかけるよ。そうしたら生きていけるんじゃないかな。

これはきつと、そうでもないと生きていけない、という意味だったのだろう。

だけどこれは裏を返せば、エリカさえ傍にいれば生きていけるという意味にもなる。帰れば、家にはエリカがいるのに。

ああ、こんなにも愛しいなんて…。

「さあ、そろそろお休みの時間だ。俺達のファミリーを…うちの若を殺した罪は限りなく重いぞ」

服のはだけた胸元。言うことを聞かない傷だらけの体。心臓の真上

にあてがわれた大きなナイフ。まだ奴は死んでなんかいねえよと心中で呟きながら、この命はあと何秒持つのだろうかと俺は酷くつまらないことを考えていた。

「死ね」

ぐさり。

何か呆気ないほどに、静かに死は訪れた。

蹴られても、刺されても、殴られても、もう痛みも何も感じない。もっと痛いのだと思っていたのに。

そうか、これで、俺は死んだのか。

……エリカは気が付くだろうか。

あの香水の持つ意味に。

どうかどうか、気が付かないでいて……。

瓶の底に刻んだ、あの言葉には……。

・

「えつとおい、皆さんにいー、大事なお知らせがありまゝす」

のほほんとした表情のその男の口から出てきた言葉は、そのへらへらと緩んだ顔からは全く想像も出来ないくらい酷い内容のものだった。

「今まで、なんとかかんとか警察の介入を防いできた我がアブレイクス・ファミリーなんですが、なんかもう防ぎきれないっぽい状況です。さらに二人程、ここに潜入捜査に入って来てる奴もいるみたいでーす。

ちなみに、その捜査官の一人はこの僕でーす。あつはーっ、みんな驚いた？　びっくりした？」

えへ、などと言って可愛らしく舌を出す童顔の男に、その部下達はあるぐりと口を開いた。どれもこれも、およそマフィアの若頭とは思えない台詞である。しかも事実上このグループを統括しているのはこの若頭であるというのに。一方本物のボスはというと、もうほ

とんど隠居暮らしで顔を見せもしない。猫を抱いて暮すんだと言い張って、部下達の言うことにも耳を貸さない。

本来ならば、世代交代をする際には必ずそれに見合った大きな式を行うものだ。だが、そのボスは別に良いじゃん、と何もせずに隠居暮らしを始めてしまったのだ。その所為で、まだ『若頭』という立場に居ながら、この男はマフィア全体を取り仕切ることになったのだ。

「あ。でも、安心して。もちろん本業はこっちだからさ。向こうはただのカモフラージュ。副業だよ。敵対している組織を法的に潰せるとしてもお買い得なお仕事だね。

で、これからが本題なんだけど、その勇気ある潜入捜査官　ガレツト・コールマンってば実はかなりの切れ者でさ、正面切って争ったらこっちがちょーつとばかり危ないことになるかもしれないんだよね」

言って、にこりと笑う。

「だけど、こっちは向こうの正体を知っているし、いくらでも策を弄する時間はある。僕にはこっちに都合のいいように策を練り直させることだってできる。なんたって、僕はあいつのセンパイだからね。

だから、みんなに相談。やっぱり我がアブレイクス・ファミリーに盾突こうなんていう命知らずなお馬鹿さんは早めに消しておいた方がいいと思うんだけど、みんなはどうやってやれば良いと思う？」

幼さの残る口調で、朗らかに続ける。

「とつてもかわいい僕の後輩君だもの、とびっきりのフルコースを用意してあげなくちゃいけないよね。それこそ、あの気丈な精神が壊れて、永遠に残るトラウマを植え付けるくらいに。僕たちで一生眠れなくなるくらいの、発狂して恐怖で動けなくなるくらいの、すごい記憶を刻み付けてあげようよ！」

三十路間近の若頭は、とても晴れやかな笑顔でそう言った。

この戦は勝利を飾るものだと思っていて疑わずに。全てが、自分の思い

描いたようになると思いこんだままで。

全てが全て、幼い妄想なのだと気付かずに。

戦は終わった。

両の大將が相討ち、命を落とすと言う最後。

悲惨に、無残に、醜く、愚かに、二つの命が消えさった。

大將を失ったマフィア内で、しめやかな葬儀が執り行われた。

仏の名は、アスカ・アブレイクス。

二人の職員を失った会社内で、名簿から二人の名が消えさられた。

3

二人の職員を失った会社内で、名簿から二人の名が消えさられた。消えた名は、『ガレット・コールマン』と『アスカ・バルザック』。その二つの名は、社の規定により速やかに削除された。その死は巧妙に隠蔽され、その人間はもともといなかったことにされた。

『仕事内容 マフィアへの潜入捜査・撲滅、その他特殊任務』

警察の中で秘密裏に作られた特殊部隊。特殊任務課。

そこはFBIのように、おおよけに知られているような組織ではない。

警察内部の組織でありながら、それは独立したひとつの会社のような扱いになっていた。社員全員に徹底した守秘義務が課せられており、それを果たさない者には死にも等しい制裁が待っている。

自由は、ほぼ完璧に与えられることはない。たとえそれが、退社後であってもだ。職場から離れても、監視の行き届いた寮での生活か寮でなくともGPS等で監視される生活を余儀なくされることとなる。

もつとも、無事に退社出来ればの話だが。

特殊任務課への入社条件は、三つ。親類がいないこと、五ヶ国語以

上の日常会話が可能なこと、そして人を殺すこと・自分が死ぬことに抵抗がないこと。

ここはモラルの欠如した才人たちが集まる場所。ここでは、すべてはただの『駒』に過ぎないのだ。どんなに優れた人間であっても、一つの『もの』として扱われる。

けれど給料は破格。毎月、千万単位の給料が入り、任務の度に相当額の手当が付く。そして、毎回任務に入る前には『殉職時保障希望願い』というものを任意で提出することが出来る。殉職の際、その時に最も愛する者に保障金を与え、自分の死を知らせることが出来るという制度だ。

いつ命を落としてもおかしくない、死んでも葬儀にすら出してもらえないという闇に閉ざされたこの世界で、親兄弟・親類のいない社員にとつての唯一の光り。ひとを愛することを認めるための制度。これは特殊任務課の社員たちへ唯一与えられた情けであり、慰めだった。

その闇の世界で、二人の人間は消し去られた。

一人は、いない人間として。一人は、影の世界に名を残して。すべては、消え去った。

過去を想う

0

例えばとても大切な人が、自分の目の前で、自ら意志で、自らの手で命を絶ったとしたら。そしたら、あなたは どうする？

1

物心がついたとき、あたしはすでに一人だった。
両親とも他界していて、あたしは酷く厳しい先生のいる施設で育てられていた。

『ミス・カフラ』

そうやってあたしの名を呼ぶ先生たちは、いつも侮蔑するような目であたしを見ていた。決して笑わず、決して泣かず、という塵ほども可愛げのない無口な子供は、大人たちにとってある意味脅威だったのかも知れない。もしかしたら未知の生物のように、怪物のように見えたのかもしれない。

何もかも見透かしているようなあの黒い瞳が怖い。

感情が欠落しているようで、気味が悪い。人間ではないみたい。

一度、先生方がそうやって話しているのを聞いたことがある。

やっぱり本当は人間なんかではなくて、あたしは何処か違う、異世界からやってきた別の生き物なのかもしれない、などと思った。まだ年端もいかない子どもだったのに、自分で自分のことを怪物なのだと思って生きていた。

薄気味悪い、異形の、未知の生物。

あの時のあたしは、自分はそういう生き物なのだと思っていた。そんなあたしに、周囲の大人たちは冷たいまなざしを向けるばかりだった。だから捨てられたんだなどと言う者もいたくらいだ。

あたしの親は死んだんだ、あたしを捨てた訳じゃない。

心の中でそうやって言い返すことで、あたしはなんとか平静を保っていた。

それに、いくらなんでも、自分の子を薄気味悪いだの気持ち悪いだのと言う親なんかないだろうと思う。でももし、そうだったとしたらと考えると凄く怖い。

その当時、あたしが友人と呼べる人は、心許せる人はただ一人、同じ施設に居た二つ年上のお姉さんだけだった。病気がちで、小柄でとても繊細なガラス細工みたいに綺麗なお姉さん。白くて細くてふわふわしていて、いつも、まるで妖精みたいな人だと思っていた。何か理不尽なことで酷く怒られたりしたとき、彼女はそれでも一切表情を変えないあたしの頭をポンポンと慰めるように叩き、よく耐えたねと微笑んでくれた。

それが、一体どれだけあたしの支えになっただろう。

いくら怒られても叩かれても、その先には優しい掌が待っている。そう思うだけであたしはいくらでも耐えることが出来た。あたしよりも小さな彼女の手が、あたしにはとても大きく感じられたものだった。

……だけど、どうしてだろう。彼女が死んだとき、あたしの眼からはほんの一筋の涙すら出てこなかった。

もし自分の大切な人が自分の目の前で、自らの意思で、自らの手で命を絶ったとしたら。そんなとき、あたしは一体どうすれば良かったのか。

エリカちゃんごめんねと泣きながら、彼女は自分の腹にナイフを突き立てた。刃渡り十センチにも満たないはずのそれは、殺傷能力な

んてまるで無さそうな小さなナイフは、小柄な彼女が持つと、ごつごつとしたとても大きな凶器に見えた。

痛くて苦しくて、もう生きているのが辛いんだ、と彼女は笑った。

笑顔のまま、この世から去っていった。

どろりと、血が、流れた。

あたしは、何も出来なかった。その瞬間を見て、立っていられなくなった。その場に座り込み、誰か来るのを待っていた。声すら出てこなかった。死なないでと叫ぶことも、どうしても問いかけることもできず、倒れている彼女に駆け寄ることもできず、あたしはいつまでも呆けていた。

その様は、異常。

薄暗がりの部屋、立ち込める血液の臭い、腹に包丁を突き立て横たわる少女。

それを眺める、あたし。

様子を見に来た先生によると、あたしはまるで人形のようになっていたらしい。動かず、しゃべらず、泣かず、だらりと腕を垂らしていた。ただ手を引かれるままに動いていた。お葬式の時も、あたしは一切泣くことはなかった。

なんて薄情な子なんだろう、あんなに可愛がってもらっていたのに。

あの子には感情がないんだね、ちっとも悲しくなんてないんだよ。

そのとき、先生方の嫌悪は恐怖に変わった。彼らの中で、あたしは感情を持たない生き物、動物となったらしい。いや、感情を表す尻尾すら持たない、動物以下の存在になったのだ。

エリカ・カフラは表情がなく、喜びも悲しみも一切感じない。身近な人がなくなっても、辛い、悲しいなどという感情を持つことなどない下等な生き物なのだ、と。

そんなわけあるか。悲しくて悲しくて、今にも消えてしまいそうなのに。

この時、あたしは十五歳だった。

人の死がどういふものなのかだって、十分に理解できる年齢だ。彼女はもうあたしの傍にはいないのだ、もう決して会うことはできないのだ。そう考えるだけで、凄く辛かった。それから一週間、あたしはほとんど眠ることが出来ず、ほとんど食事を取ることも出来ず、部屋の隅で膝を抱えて過ごしていた。

『誰もあんたのことを可哀そうだと言わないから、いじけているんじゃない』

先生に言われたのは、その言葉。

可愛がってくれたお姉さんが死んだときに涙も見せないような子が、慰めてもらえらると思ったら大間違いだ。そう言っつて、鼻で笑った。

あたしを、小賢しいと言った。いくら十五の子供だとて、そんなくだらないことでいじけたりするもんか。

泣かなかつたら悲しんではいけないの？

感情を表に出さなかつたら感じてはいけないの？

思っつて、あたしは施設を出た。住み込みで家政婦のアルバイトを始め、通つていた高校を辞め、定時制の高校に編入した。学費も全部、自分で稼いだ。あたしには表情が欠如しているらしいと、鏡の前で表情をつくる練習もした。たくさんの人を観察し、人はどういふ時に笑うのかという研究もした。

今でもそんなに表情豊かな方ではないけれど、以前と比べればよく笑うようにはなつたと思う。きつと、表情をつくることに慣れてきたのだらう。ただやっぱり、涙だけは出て来なかつたけれど。

どんな話も、どんな言葉も、あたしの涙腺を緩ませることはなかった。

だから、あたしは一つ、何かを信じることにした。

それは神でも天使でもイエスでも予言者でもなく、自分を守ってくれるもの。

それは人であつたりものであつたり、そのときによつて変わつてくるものであつたけれど、その時々でそれを心から信じることにした。そしてそれを、あたしは心の中で“神”と呼んだ。

あたしだって、心から信じているものに裏切られれば涙の一つくらい流れるんじゃないかと思つたから。結局、あたしを泣かせるものなど一つもなかつたけれど。

誰もが、離れていった。

あたしから離れていかなかったのは、たつたの三人。

綺麗な髪の子と、家を持たない老人。そして教会で出会つた警察官。その三人だけは、いつもあたしを迎え入れ、あたしに笑顔を向けてくれた。

あたしはいつも、彼らの為に祈りをささげた。

初めは、美しい友人の為に。

『エリカは本当に綺麗ね』

彼女はいつも、そう言つてくれた。あたしはいつも、彼女の幸せを願う。

次に、それから出会つた老人の為に。

『お前の信心深さには頭が下がるよ、黒髪の天使さん』

彼はいつも、そう言つてくれた。あたしはいつも、彼の未来を願う。

そして、とても愛しい恋人の為に。

『愛しているよ』

彼はいつも、そう言つてくれた。あたしはいつも、彼の喜びを願う。

あたしはいつでも、いつまでもこの三人を心から信じよう。彼らが、あたしから離れていかないでいてくれる限り。信じ続けよう。崩れかけの、この寂れた教会で。

そこであたしは、その三人の神の為に毎日毎日祈りを捧げた。

『いつもあたしを見つめ、守ってくれるこの三人をどうかどうかお守りください』

誰に祈っているのかは、最後まで分からなかったけれど。

2

いつからだろうか。

眠ると、俺は必ず悪夢を見る。

ベッドに入り、目を閉じる。そしてうつらうつらと浅く眠りに落ちそうになると、必ずと言っていいほど不快なイメージが瞼の裏にじわじわと滲み出してくる。その度に俺は嫌な汗をかき、荒く呼吸をしながら飛び起きるのだ。

世界中のすべてが消えてしまい、この世にただ一人、俺だけが取り残される夢。ぼつねんと一人生き伸びる夢から飛び起きて、辺りを確認し、窓の外を見る。街灯や、車のライト、建物から漏れる小さな明かり。多くの人が活動をしているその状況を見て、いつも通りの全てを見て、何一つ消えてはいないのだと確認して俺はようやくほっと息を吐く。ほとんど毎日が、その繰り返しだった。

俺は多分、一人になることを極端なまでに恐れていたのだと思う。幼いころ　ちょうど、物心の付いたところに俺の母親は消えた。死んだ、ではない。消えたのだ。ある日突然、姿を消した。詳しいことは知らないが、以前から心を病んでおり、長く通院していたという話を父から聞いたことがある。今頃はきっと、何処かで息絶えていることだろう。

しばらくして、父親が死んだ。交通事故だった。

その後、俺は叔父の家に引き取られたが、叔父も、ほどなくして死んだ。遺体の状態が明らかに異常だったため、殺人だったのではないかと言われている。犯人はまだ捕まっていない。

そうやって、俺は六人もの親戚を殺した。不思議なくらい、俺と関わる人間は次々に死んでいった。じわじわと自分を侵食していく黒い恐怖。

半年間、俺は家に引きこもっていた。自分は呪われているのだと、

悪魔に憑かれているのだと思った。そしてその後、久方ぶりに言った高校で、何かが壊れたように暴れまくった。気が付いたら窓ガラスを割っていた。気が付いたら、身に覚えのない金が手の中にあつた。自分のものではない血液が服についていた。いつも、その行為をしている時の記憶はない。気が付いた時には、何もかも終わっていた。

そして、その後にはいつも手錠がかけられていた。俺はその相手が誰なのかも覚えていなかったというのに。

何度目かの逮捕の時、俺はようやく落ち着いてきた。何がきっかけだったのかは忘れてしまったが、とにかく、俺は大人しくなった。そして、夢を見るようになった。いや、この夢がきっかけだったのだろうか。

いつも夢に見るのは、自分の記憶。

じわじわと大切な人が一人ずつ消えていく、一人ずつ消していく、俺の記憶を重ね塗りしていくような、膿んだ傷口を更にえぐっていくようなおぞましい記憶。夢だとしても、思わず絶叫してしまいそうになる。

夢から覚め体を起こした時には、ぞわりと体中に鳥肌が立ち、酷い吐き気に襲われる。俺はこれを『眠りアレルギー』と呼んでいた。人体の約七割を占める水分がアレルギー源となっている人もいるくらいだから、人間の生理的欲求の一つである眠りがアレルギー源だと言ってもそうおかしいことではないだろう。

俺は一人だと、その恐怖からか眠ることができなくなった。一人暮らしの自分の家では静けさがひたひたと恐怖を運んでくる。けれど人のいる明るいところでは、すぐに眠りに落ちることが出来た。何故だかおかしな夢も見ないで済む。きつと、安心できるからなのだろう。

この症状が出初めのころは、本当に眠れなかった。少ししてから是用もないのにわざわざ電車に乗り、そこで仮眠をとることでのいでいたが、俺は次第にこの奇妙な病を抱え、友人の家を転々とする

ようになった。頼むから寝かせてくれ、と。そして友人のベッドを占領して、気がついたら二十時間以上を眠り続けていたこともある。その友人はというと、俺から布団をはぎとってベッドの下で丸まって睡眠を取っていた。

そうして、何時しかついたあだ名は『眠り姫』。

姫などという柄ではないが、確かにそう呼ばれてもおかしくないほどに俺は眠りこけていた。目を閉じてすぐに深い眠りに落ちなければ、悪夢は必ずやってくる。今では少し強めの催眠剤を服用することで解決したが、当時は本当に気が狂いそうだった。もういいと自棄になって十日近く眠らずに過ごした時など、これは自殺にも近いと自嘲し、いよいよ医者に行った。

医者には、これ以上眠らずにいたら精神が崩壊すると言われた。それどころか、この時の状態で精神が崩壊してないのが不思議なくらいだったらしい。催眠薬を処方され、カウンセリングを受けることを勧められた。結局、最後までカウンセリングを受けることはなかったけれど、自分が『異常』なのだと認めることが、怖かったのだ。

この時の俺はまだ普通の警察官で、他人の死よりも自分の死を恐れていた。死の世界に入って行こうとしている自分にも気付かずに、死にたくないと思っていた。

警察なんて職についていながら、『もしもの時には、体を張って貴方を助けましょう』なんて、そんな勇氣は微塵もなかった。自分を守ることに、自分を庇うことにはかり精一杯で、俺には周りを見ている余裕すらなかった。

「　　なんだ、もう起きたの？」

だけど、あの時から俺は変わった。

あの時から、物を壊すことにも、他人を殺すことにも、自分を墮すことにも、一切、恐怖を抱かなくなつた。

「あーあ、もう少し眠っていてくれると思っていたのに」

目の前には、俺に馬乗りになっている男。眠りの場を提供してくれた友人。友人だと、思っていた男。

「……何をしている」

両手首には俺が所持していた黒い手錠が掛けられ、パイプベッドの柵に固定されていた。手錠つて黒いんだね、銀色なんだとばかり思っていたよ、と奴は笑った。銀色なんて目立つ色の物持ち歩けるか、と俺は言い返す。

それにしても、こいつは一体俺をどうするつもりなのか。

まさか身代金目的なんかじゃあるまいな。確かに金はあるが、身内なんかいいやしないのに。それなら初めから恐喝なり何なりした方が手取り早い。それより何より、この変態じみた格好は何とかならないものだろうか。安っぽい官能小説みたいな事をするつもりなど、俺にはさらさらないのだから。

「俺の彼女がさ、お前に一目ぼれしたんだってさ。昨日、振られちゃったんだ」

誰が俺にどんな感情を抱いたとしても、それは俺の責任ではないだろう。そんなものは個人の自由だ。大体、俺はこいつに彼女がいたことすら知らなかったというのに、何故こいつは俺の首に手を掛けているのか。逆恨みも甚だしい。

「お前の事、すっげー憎い。お前さえいなかったら、俺は彼女とずっと一緒に居られたのに。お前さえ、いなければ。お前さえ……」

馬鹿馬鹿しい、だから俺にどうしろと言っんだ。

同情はするが、お前の色恋など俺には一切関係のないことだ。それに、お前の彼女にとってはもとその程度のお付き合いでしかなかったただけだろう？ 彼女を繋ぎ止めておけなかったのは俺の責任だとも言うのか？ それともまさか、顔も知らないお前の彼女を説得しろとも言っつもりなのか？

「なあ、死んでくれよ。俺の為にさ。そうしたらきつと、あいつは俺のところに戻ってきてくれるんだ」

その言葉にも、俺は一切の感情を持たなかった。怖いとか、辛いとか、そういう感情は一切沸き起こっては来なかった。ただ、なんて鬱陶しい奴なんだろう、と。

思ったのはただそれだけ。

それにしても、どれだけ馬鹿なんだお前は。戻る訳がないだろう。どこの世界に好んで殺人犯と一緒に居ようなんて女がいるんだ。いや、女に限らずともそんな人間などいやしない。戻る戻らない以前に、最初からそんなに想われてもいなかったのに。そんな簡単なことにも気がつかないほど、お前は壊れてしまっていたのか？

取り敢えず、足を拘束されていないのがせめてもの救いだつた。めりめりと喉に食い込んでくる指の感覚にもがきながら、思い切り奴の腹を蹴飛ばしてやった。奴は呆気なく俺の首から手を離し、後ろへ飛んだ。パイプベッドの柵にガンと後頭部を打ち付け、わずかに呻いた。急速に流れ込んできた酸素の冷たさに咳込んだとき、ふと血の臭いを感じた。そして自分の足元で動かなくなっているものを見て、

ああ、殺してしまったのか。

ただ静かに、そう呟いた。

俺は目覚まし時計の代わりにと枕元に置いておいた携帯電話をなんとか手に取ると、『110』を押した。プルル、と無機質な電子音がする。

『はい、110番です。どうしました』

枕元に電話を置き、少し大きな声でこう言った。

「友人を、殺してしまつたみたいです。ちょっと動けないので、ここまで来ていただけませんか」

住所を言い、拘束された状態のまま警察が来るのを待った。手錠の鍵は手の届かない所に放られている。

溜め息を吐き、俺は思った。案外、なんとも思わないものなのだな、と。自分の周囲で自分の関係者が次々に死んでいくのには耐えられなかったのに、自分で殺しても何も感じない。

ただ、ごく普通の日常の中にいて、ごく普通に生きていて、それでも誰かが誰かを殺す可能性を持っていて、誰もが誰かに殺される可能性を持っているのだと、俺はただ単純にそれだけを思っていた。誰もが壊れ、狂い、堕ちていく可能性を持っているのだと、俺は理解した。

なんとなく、悟ってしまった。

この時俺は特殊任務課への移動を決めた。きつともう、普通の警官の仕事など馬鹿馬鹿しくて続けていられないだろうなと思ったから腕を拘束された状態のまま、特殊任務課に移るための条件を頭の中でひとつずつ挙げていった。

大丈夫。どれも、クリアしている。

俺は少しだけ、笑っていた。

自分の死も他人の死も、いつ訪れたとしても可笑しくはない。それならばいつそ、潔く自らの意志で危険の中に入って行ってやろう。

生きるも死ぬも一つのゲーム。

そうやって、割り切ってしまうえば簡単だ。精々バッドエンドにならないように足掻こうじゃないか。

部屋に入ってきた警察は俺の状況を見て、一瞬動きを止めた。そして俺の手を拘束している手錠を外しながら、彼等は俺を質問責めにした。

彼にやられたのか、どうして、何の為に。

どれもこれもくだらない質問ばかり。

理由は逆恨み。ただそれだけのことなのに。くだらないと思いながらも、仕事柄これは聞かなくてはいけないものなのだということが俺は知っている。俺だっていつも、こういうくだらない質問ばかりして食っているのだから。俺は淡々と、事務的に答えていった。眠りアレルギーの事も、彼の事も、彼の彼女の事も、全て。

大丈夫ですか。

災難でしたね。

慰めの言葉も酷く空虚で、陳腐なものばかりだった。

ああ、なんてくだらない。誰も気づかないのだな、と俺は同業者たちを眺めた。こんなにも気付き難い、こんなにも簡単なことが、そこかしこに散らばっているのかと思うと背筋が凍る思いだった。

……なあ、早く気付けよ。

お前たちだって、『可能性』を持っているのだということに。

3

ガレットと付き合いを始めた時、彼はあたしにこう言った。

『君は人殺しの事を好きになれるのかい？』

だから、あたしは答えた。

「あなたが人殺しであることとあたしがあなたを好きなことと、一体そのどこに関係性があるのかしら？」

ガレットは一瞬目を大きく見開いて、そしてほっとしたように微笑んだ。

もちろん、別に人殺しが好きって訳じゃない。好きになった人が、たまたま人を殺したことがあったというだけ。

だけど一度好きになってしまったら、人殺しだろうとなんだだろうと、そんなものは嫌いになる条件になど含まれなくなる。それは過去の出来事であって、今の出来事ではないのだから。まあそうだったのと驚きはするけれど、そんなもの、すべては過去のことと瑣末なことだと流してしまえる。

それに、彼に語られる以前から、あたしは初めて出会ったときから彼が人殺しだということは知っていたのだ。分かっている、しっかりと理解した上で彼のことが好きだと言った。

毎日新聞を読み、毎日ニュースを眺めていれば嫌でも目に入ってくる様々な情報。

それはとても小さな記事ではあったけれど、確かに彼は載っていた。殺されそうになった青年が誤ってその相手を殺してしまった、という記事。彼が警察官であること、理由が女がらみの怨恨であること、

それだけが短く書かれていた。ニュースでもちょこちょこと見る機会があった。結局、彼は正当防衛ということで無罪になったらしい。状況が特殊だったため、過剰防衛ということにもならなかったらしい。

あの寂れた教会で彼と会ったのは、その判決の下った五日後の事だった。

仕事にいそむ彼の様子は、あの事件の事など微塵も感じさせなかった。事件の事など全て忘れてしまったように、顔全体に無機質な笑顔を張り付けて、彼はあたしに話しかけてきた。

『君、何をしているの』

酷く穏やかな口調だった。

あたしは驚いた。これが、つい先日人を殺したという人間なのかともし何も知らない人だったら、なんて感じのいい人だろうと錯覚してしまいそうだった。本当に誤って殺してしまったのなら、もう少し塞ぎ込んでいそうなものののに。

『お祈りに来たのだけど、今日は入れなさそうね』

言いながら、あなたは壊れてしまいそうねと思った。

まるでバランスの悪い積み木か、トランプのタワーみたい。

ちよつとでもつついたら、ばらばらに崩れてしまいそう。あたし達は少しでも言葉を変えた。

ああ、あなたは毎日殺伐とした世界の中にいすぎて心が壊れてしまったのね。ヒトを殺したことですら、過去の出来事だと自分の中で処理してしまえるくらいに。泣きだしたいような衝動も、叫び出したいような悲しみも、そういう激しい感情を全部自分の中で麻痺させることが出来るようになってしまったのね。

あたしは、あなたに同情した。

なんて可哀そうな人なのだろう、と。すべてを自分の中に抑え込んで、まるでトランプのジョーカーみたいに作り物の笑顔を張り付けて。……そうやって仮面をかぶることで、自分を守っているのね、

と。

『大通りに出て五分くらい歩いた所にも教会があつたはずだよ。最近出来たばかりの、立派なやつが』

『そんなところに神様がいるとでも？』

おかしな会話をして、あたしは彼に背を向けた。

妙に、彼の事が気になった。

次の日も、その次の日も、あたしは教会に行った。祈りを捧げるためにではなく、あなたに会うために。形だけ、祈りに来たのだというように装って。教会に行くと、あなたはいつも笑顔で迎えてくれた。それを、あたしは素直に嬉しいと感じたのだ。

作り物の笑顔だというのは、いつもすぐに分かったのに。

ほんの少しの悪戯心。ちょっとだけ、翻弄してやろうと思った。

『何？』

静かな口付け。

驚いて身を引いたあなたが可愛くて、ああ、あたしはこの人に惹かれていたんだと初めて気が付いた。だからあたしは彼にこう言つた。

『あなたの事、気に入ったわ』

人を好きになるのに必要な条件。そんなものはないのだと、何となく気が付く。あるのだとすればそれは、自分がその人に惹かれるか惹かれなにか。きつと、ただそれだけのことなのだろう。ガレットに出会って、あたしはひとを愛しいと思う気持ち、初めて知った。あたしはいつも、彼に囁く。

「愛しているわ」

どうか、どうか忘れないで。

あたしだけは、あなたから離れていくことなどないのだということ。

終章（前書き）

これでラストです。楽しんで頂ければ幸いです。

終章

0

『必ず君に会いに行くよ。』

いつまでも、エリカのことを愛しているよ。

でもどうか、この言葉に気が付かないでいて。

きつと君の心を重たくしてしまうから。』

愛しい人にこの言葉を贈ろう。

決して、気付かれないように。

見過ごして、見落として、ぽいと捨ててしまうようなところに。けれど、ほんの一時だけでも大事にして貰えるようなところが良いな。どこがいいだろう。どこにこの言葉を残そうか。

「ん？」

ふと目に着いたのは、以前から鼻屑にしていた香水店だった。

1

届いたのは、一通の手紙だった。

送り主は警察庁となっている。宛名は、『エリカ・カフラ』。どうして、とあたしはその封筒を眺めた。

「ああ。それ、ようやく来たんだね」

言ったのは、ヘザー。ソファアに腰を掛けたあたしの後ろからひよっこりと顔だけを出し、手元を覗き込んでくる。そして、あたし

の横にちよこんと座った。

「何か知っているの？」

まあね、とヘザーは笑った。

「ガレットの死が記載されているだけだよ、その手紙は。それから、殉職の保障金を受け取るための手続きに來いっていうやつも入っているのかな。多分。入っているのはそんなものじゃないの？」

「どういうこと？」

言いながら、封筒を見つめた。

「だから、言つたる？『ガレットは死んだんだ』ってさ」

……殉職。

「いい加減にしてよ。彼が、死んでる訳ないじゃない」

「そろそろ認めなよ。いくら嘆いたってガレットは帰ってきたりなんかしないよ。君は早く、現実を見ないといけない。……ガレットはもう、帰ろうと思つてもここに帰つてくることは出来ないんだから」

言いながらあたしの手から封筒を取り、勝手に封を開いた。そして、中から数枚の紙を取り出した。そして声に出して読み始める。

「『拝啓、エリカ・カフラ殿 殉職時保障規定に基づき、ガレット・コールマンにより 殉職時保障希望願いが提出されました。これにより、ガレット・コールマンの殉職保障金として1,000,000ドルを保障いたします。つきましては、警察庁特殊任務課までお越しく下さい』だつてさ。ああ、ご丁寧に地図まで付いている」

「……行かないから」

だつて、信じたくないんだもの。

そこに行つてしまつたら、そのお金を受け取つてしまつたら、彼の死を認めることになつてしまふじゃない。だから、あたしは決めたのに。あの頼りない優しい笑みを浮かべることなく、しんとして静まりかえる彼を見るまでは絶対に信じないと。

「だつて、その手紙、彼が死んだなんてこと一言も書いてなんか、いない、じゃない。ガレットが死んだなんて、一体どこの誰が言つ

たのよ……」

「これだけ書いてあれば分かるだろ、ってことなんじゃないの？
まあ、確信をつかない書き方をしてることは認めるけど」

「だったら、行ったら彼と会わせて貰えるの？ どうせ行っただって、手続きだけで終わっちゃうのよ。彼に会わせてもらえなきゃ、行く意味なんてないわ。それに、あたしはお金なんかに興味はないのよ」
手紙を封筒ごとゴミ箱に突っ込んだのを見て、ヘザーは一つ溜め息を吐いた。肺の中の酸素を全部出し切るみたいなの、深いため息。

「……ガレットに、会いたい？」

「当り前でしょ」

「止めた方がいいよ。もしガレットの死体があつたとしても意味はない。そこにあるのは、ぐちゃぐちゃになった肉片だけなんだから、本人かどうかなんて分かりやしない。それに、そんなもの見たって気持ち悪いだけだよ」

一切表情を変えずに、ヘザーは言った。

「……なんで？」

「何が？」

柔らかな笑みを浮かべたまま、ヘザーは言った。

何をそんなに怯える必要があるの、と。

ガレットは常に、生と死の狭間に生きていたのに。今自分が存在していることが夢なのか現実なのかも分からなくなるくらい、ガレットは君を愛していたのに。

これが夢なら早く覚めてくれ。そうすれば、俺は心おきなく死ぬことができる。

これが夢なら早く覚めてくれ。そうすれば、本当に彼女を愛することができる。

いつも、そう思っていたんだよ。

「……なんで、そんな、まるで自分が感じてきたことのように語る

ことができるのよ。彼は……、彼はあなたじゃないのよ。からかうのもいい加減にしてよ！」

その言葉に、ヘザーは楽しげに笑った。

「からかってなんかいないよ。俺は、本当の事しか言わないから」

「嘘よ」

嘘じゃないよ、とヘザーはあたしの髪を撫でる。

そして、くすぐすと悪戯っぽく笑った。

「……どうして気付かないかなあ」

そう言って与えられたのは、とても優しい、とても身近な口付けだった。

ふわりと香るオードランジュヴェルド。彼の周りには、いつもこの香りが漂っている。懐かしい記憶を呼び起こす、甘い香り。

あたしは思わず、自分の唇に触れた。

「はは、ようやく口直しが出来たよ」

「……これ」

懐かしい感触に、泣きそうになった。これは……これは、彼の口付けだ。とても優しい、穏やかで、静かなあたしの恋人。

「……“エリカ”と“ヘザー”っていうのは、同じ花のことを指すんだ。……この花言葉は、知っているよね？」

ヘザーは、酷く大人っぽくそういった。十歳にも満たないであろう彼の見た目からは想像もつかないくらい、穏やかで落ち着いたテノールの声。その声は、あたしを酔わせる響きを持っていて。

「……『博愛』、でしょう？ ……良く言ってたものね、君は博愛の花なんだよって」

あたしは気が付いた。

ヘザーが、誰なのかに。

「うん。でもね、本当は他の意味も持っているんだ。“裏切り”と、“孤独”っていう二つの意味をね。……どんな仕事をしていたのか、知っているよね？」

「警察って聞いていたけど……」

言ったあたしに、ヘザーは苦笑した。

「うん。それも、FBIですら避けて通るような、危険な仕事を専門にする特殊部隊のね」

呆然とするあたしを余所に、ヘザーは話し続ける。淡々と、無感情に。今日の予定は、とでも言うように、その仕事の実態を語った。「マフィアの撲滅とかを主にやっていたんだ。潜入捜査から始まって、マフィアのまねごとをして相手を安心させて、最後に、そのマフィアの頭を討つ。」

この仕事はね、人を欺くことも人に危害を加えることも、人の命を奪うことでさえ、ある程度までなら許されていた。……何のために力を使うかで、嘘も、暴行も、人を殺すことですら許容されてしまった、この世界は。正義を盾に、“警察”というマフィアに所属していた」

「嘘よ。虫も殺せなかったのに」

「俺は、ウソなんかつかないよ。口を閉ざすことはあってもね」

どうして、あの時と同じことを言う。人の命のはかなさを、未来を定める約束の脆さを説いたあの時と、おんなじ台詞。

ああ、彼はどれほど辛い目に逢って来たのだろう。

虫も殺せないような優しい人が、人を欺き、人を傷付け、人を殺める。

ああ、どれほど辛かっただろう。

子供や動物たちによく懐かれる穏やかで優しい彼が、一体どんな気持ちでその仕事を続けていたのだろう。

「……それは、本当なの？」

「本当だよ。だけど、一緒に任務に就いていた奴に裏切られてね、殺されたんだ。仲間だと思っていた奴が、そのマフィアの幹部だった。それも、ほとんどトップに近い地位にいた。」

そいつから散々暴力を受けて、体中を傷付けられて死んだんだ。その後もずっと、ナイフでめちゃくちゃに切り刻まれて、蹴られて、殴られて、袋叩きにされた。最後にはもう、自分が何をされている

のかも分からなくなっていた。最後に感覚が全部なくなつて、俺は死んだんだな、って気が付いた」

「なんで、そんなに悲しいことを続けていたのだろう。なんで、少しでもあたしに頼ってくれなかつたんだろう。そんな悲しいことを、そんな淡々と語らないで。…こんなの、辛すぎる。」

「あたしを悲しませたくなくて、あたしを泣かせたくなくて、そうやって隠していたんだ。あたしが泣かないことぐらい、あなたは知ってるのに」

「ごめんね。でも、君にだけは知られたくなかつたんだ。俺の汚い所なんて、これ以上見せたくなかつた。知らないでいて欲しかった」
「なんで？ どうして？ ああ、でも、彼は……。」

「……それじゃあ、仇を討ちに行かなくちゃいけないわね」

「奴は死んだよ。それに、言つたろ？ 『君は博愛の花なんだ』って」

「そのマフィア自体はまだ残っているんでしょう？」

「うん、一応ね。トップのいなくなつたあのグループが、これからいつまで持つかは分からないけど」

「ひつこき一月持つかどうかだって怪しいよ、と彼は言つた。」

「ならその一月を一週間に縮めてやりたいと、あたしは思う。一日でも早く、一分でも早く、そいつらを地獄に墮としてやりたい。」

「ガレットは……あなたは、もしあたしが死ねって言つたらあたしを殺して死ぬって言つたわ。あたしに殺されるのも良いかもしれないって、あなたは笑っていた。どんな形であれ、あたしの為に命を手放すことができるって言ってくれた人が殺されたのよ。」

「あたしには、仇を討つ権利が、義務があると思わない？ そのマフィアごと、あたしが潰してやるわ」

「駄目だよ、エリカ。……君は博愛の花なんだ。裏切られ、孤独に断たれた命を、唯一癒すことができる博愛の花」

「嫌よ」

「嫌でも、駄目だよ。手を出したら君も死ぬことになる」

「そんなもの、覚悟のうえよ」

懇願するようにあたしを見つめ、困ったような笑みを浮かべる。
あたしはこの、頼りない笑顔が好きなのだ。

「……もし俺が、生きて欲しいって言ったら？」

「……私のマネなんかしないでよ」

「ねえ、どうするの？」

そんなの、決まってる。

「生きるわよ。そんなこと言われたら生きるしかないじゃない。だけど、あなたが隣に居てくれなきゃ嫌よ。あなたがいつも、いつまでも、ずっとあたしの傍にいてくれるなら、生きていても良いわ。そうしたら、あたしは『死』じゃなくて、『生』を選ぶ」

「傍にいるよ」

「口約束は嫌よ。あなたも言っていたじゃない。約束は、空虚で曖昧で、不確定なものなんだ、って。そんなの嫌よ。しっかりと確定した、絶対的な言葉じゃない限り、あたしは認めない」

やっぱり、その顔に浮かべるのは困ったような笑み。何も変わらない。あなたは優しくすぎるわ。あたしの我儘にも、あなたはいつも微笑んでくれる。

愛しい人。

あたしはあなたの傍にいたい。

「いつでも、君を見守っているよ。傍にすることは約束できないけど、この約束だけは絶対に守ることが出来る」

「遠すぎるわ」

遠距離恋愛にも限度があるわとばかりと、ヘザーはうん、と呟いた。

「ごめんね。だけど、俺の行くべきところは雲の向こうにあるから」
「分かったわよ、さっさと天国なり地獄なりへ行けばいいわ」

「仇を討とうなんて思わないで」

念を押すようなその言葉に、あたしはそんなこと思ってなんかいないわよ、とムキになって言い返す。

「……もう、一時でも私のところに戻って来てくれたって事だけで満足しなくちゃいけないのよ、あたしは。…そんなことくらい、あたしだって分かってるわよ」

「ありがとう」

「ばさりと、真白な翼が視界を遮った。」

「……羽？」

「ヘザーはクスリと笑った。」

「似合う？」

背に現われた大きな翼を見せるように、ヘザーは一度、その場にくるりと回って見せた。にやりと悪戯っぽく口角を上げるヘザーに、あたしも少しだけ笑って見せる。

「……ずっとお化けなんだと思っていたわ」

「エリカらしい。それじゃあ、そろそろ行くね」

「約束、破るんじゃないわよ」

「うん。いつまでも、君を見守っているよ」

羽音がした。

そして一度ふわりと白い羽を揺らして、幾枚かの白い羽を落としながら空気の中に溶け込んでいく。

最後に彼があたしに見せたのは、『ヘザー』ではなく『ガレット』の姿。彼は幻影のように揺らぐ姿であたしの額にキスしてくれた。相変わらずの、優しい手つきで。

そして、かすかなオードランジュヴェルドの香りときらきら光る金色の余韻を残し、ガレットは消えた。

瞬いては消える金色は、ゆつくりと、時間を掛けて薄れていく。

あたしはずっと、ぼんやりとガレットの消えた空間を見つめていた。涙が零れ落ちた。

一瞬、これは一体何なのだろう、と目元に触れる。

ひやりと冷たい、濡れた感触にあたしは泣いているのだと初めて気が付いた。『泣く』というのはこう言うことなのか、と。

涙が止まらない。音もなく、涙は頬を濡らす。

……ああ、ガレットは天使だったのか。

「さようなら、あたしの天使様」

フロリングの床に落ちた一枚の白い羽を拾い上げる。そして、あたしは涙に濡れた唇でそれにキスをした。
愛しい人に贈る、最後の口付けを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8944r/>

どこからか、羽音

2011年4月24日08時36分発行